

日本がん看護学会の45歳未満の会員を対象とした
研究活動支援ニーズの調査

<最終報告書>

一般社団法人日本がん看護学会 学術委員会
林直子，小笠美春，麻生咲子，入澤裕子，沖村愛子，佐藤まゆみ，
高橋奈津子，宮下光令

一般社団法人日本がん看護学会 理事長
鈴木久美

目 次

I. 研究の背景と意義	1
II. 研究目的	1
III. 研究方法	
1. 調査対象	2
2. 調査期間	2
3. 調査項目	2
4. 調査方法	2
5. データ分析	3
6. 倫理的配慮	3
IV. 結果	
1. 対象者の背景	3
2. 研究活動の状況	3
3. 学会に求める研究活動支援	8
V. まとめ	
1. 研究に関する知識や技術の提供	17
2. 研究活動のためのネットワーク作り	18
3. 学術活動・研究活動の推進	19
引用文献	20
図・表	22

I. 研究の背景と意義

近年のグローバル化の進展，地球環境問題の深刻化，経済・産業構造の変化など，社会が直面する多くの課題を解決するために，あらゆる分野において，次世代を担う若手研究者の活用と育成が重要な課題となっている¹⁾．看護学分野においても，人々の生活や環境を包括的に捉え，医療と介護の連携，生活支援や環境改善等を含めた多面的なケアの開発が求められており²⁾，次世代を担う若手研究者の活用と育成は，優先して取り組むべき重要課題に位置づけられている．

とりわけ，がん医療・看護においては，社会構造の複雑化や人々の価値観や文化，生活の多様化，がん治療・療養・生活過程への先端科学の導入等により，がん医療・看護へのニーズは今後さらに拡大することが予測されている．このような状況のなか，日本がん看護学会は，今後10年の将来を見据えた将来構想について「2020年日本がん看護学会の課題と今後の発展の方向性」³⁾の中で，研究基盤の強化と研究支援体制の整備を重要課題の一つとして位置づけ，若手研究者支援の必要性を挙げている．そこで，学術委員会では，若手研究者に対する学会としての支援を検討するために，若手学会員の研究活動に対する支援のニーズを把握する必要があると考えた．

若手研究者を取り巻く現状については，日本看護科学学会が39歳以下の学会員を対象に，研究の実施状況⁴⁾や阻害要因⁵⁾に関する調査を行ったものがあり，若手研究者の多くは，十分な教育や経験を得られないまま教育活動を行っている可能性を指摘している．また，若手研究者の学習ニーズに対しては，研究以外で時間的制約を受けやすい若手研究者の状況に応じ，利便性と認識を考慮しながら多様で具体的な学習支援を行っていく必要性を示している⁶⁾．このような状況をふまえ，日本看護科学学会では，さらに45歳未満の若手研究者が求めている研修ニーズ調査を実施し⁷⁾，その結果を研究および教育活動支援に活用している⁸⁾．また，近年では，複数の看護系学会が若手向けのセミナー企画，研究者ネットワーク構築支援，研究助成など様々な若手研究者支援を実施し^{9) 10) 11)}，若手研究者の育成とその活躍を推進する取り組みを行っている．

日本がん看護学会の学会員の8割弱は臨床看護実践の場に所属している．そのため，日常的に研究活動を実施することは，指導者不足や時間的制約があり容易ではない³⁾．がん医療・看護が直面する新たな課題に対応していくためには，臨床において実践課題に取り組む看護職の知をエビデンスに転換し，研究成果を活用したケアを創造していくことが重要である．そのため，がん看護の将来を担う若手学会員を対象に，研究活動支援に関するニーズ調査を行うことは，本学会が提供できる具体的施策を検討する基礎的資料となると考える．

II. 研究目的

本研究は，日本がん看護学会に所属する45歳未満の会員を対象とした研究活動支援に関するニーズ調査を行い，本学会が若手研究者に対して行う研究活動支援の具体的施策を検討することを目的とした．

なお，ここでいう若手研究者とは，「若手研究者または臨床研究初学者であり，いずれも45歳未満の者」とし，本調査における研究とは，「学術雑誌への論文投稿を目指した研究」とした．

Ⅲ. 研究方法

1. 調査対象

日本がん看護学会に所属する会員のうち、メールアドレスをメーリングリストに登録しており、2024年4月1日時点で年齢が45歳未満の正会員1299名を対象とした。

2. 調査期間

調査は、2024年5月27日から7月12日の6週間であった。

3. 調査項目

調査内容は、対象者の属性、研究活動の状況、学会に求める研究活動支援の3部構成とし、質問項目は27項目、分岐選択を含め最大44項目とした。

対象者の属性は、①年齢、②職場、③職場の所在地、④現在の職位、⑤最終学位、⑥がん看護に関する専門資格の有無の6項目とした。

研究活動の状況は、①現在の研究活動状況、②これまでの研究活動状況、③学術集会（国内・国外）での発表経験、④日本がん看護学会学術集会での発表経験、⑤論文投稿（国内・国外）の経験、⑥日本がん看護学会誌への論文投稿の経験、⑦研究を行うことへの関心度の7項目とし、経験については有無を、関心度については「非常に興味がある」、「やや興味がある」、「どちらともいえない」、「あまり関心がない」、「全く関心がない」の5件法で尋ねた。

学会に求める研究活動支援については、質問項目を検討するにあたり、日本学術会議協力学術研究団体の学会名鑑と認定看護師や専門看護師が入会している代表的な看護関連学会より37件を抽出し、各学会ホームページの情報から若手研究者支援事業を行っている14の学会について、具体的な支援内容を調査した。その結果、セミナーや研修会の開催、研究助成、ネットワークの構築支援が挙げられたことから、これらの内容を質問項目に含めた。さらに、日本看護科学学会が実施している調査項目^{4) 5) 7)}も参考に調査項目を検討した。その結果、①研究に関する知識や技術の提供に関する6項目、ネットワーク作りに関する4項目、学術活動・研究活動の促進に関する3項目、その他学会で行って欲しい支援を問う合計14項目を設定した。学会に求める研究活動支援の14項目については、学会員のニーズの程度を把握するため、「非常に行って欲しい」、「行って欲しい」、「どちらかといえば行って欲しい」、「どちらともいえない」、「行う必要はない」の5件法とした。

なお、質問項目は学術委員会で作成、検討した後、日本がん看護学会理事会に提出し、理事会の承認を得て最終決定とした。

4. 調査方法

本調査は、Webによる調査とした。Web調査会社に調査専用サイトの作成を依頼し、日本がん看護学会事務局よりメーリングリストに登録している2024年4月1日時点で年齢が45歳未満の正会員宛てに調査協力の依頼メールを配信、調査期間内に指定のウェブサイト個別にアクセスし、調査協力依頼文（資料1）を読んだうえで回答するよう依頼した。回答率を上げるため、当初予定していた1カ月から2週間調査期間を延

長し、調査期間内に4回のリマインドメールを送信した。

5. データ分析

得られたデータについて、質問項目ごとに記述統計を行った。また、研究の活動状況と学会に求める研究活動支援の項目については、対象者の属性（職場、最終学位、がん看護に関する専門資格の有無）ごとに回答者の割合を算出し、比較検討した。

6. 倫理的配慮

本調査にあたり、日本がん看護学会倫理委員会の承認（2024-01）を得た。対象者には、研究の趣旨、目的、方法、参加の任意性、利益・不利益、個人情報保護、データ管理などについて文書で説明し、web調査ページの冒頭に設けた同意チェック欄において、同意を確認した。

IV. 結果

1. 対象者の背景【表1】

回答数は351件で、回答率は27.0%であった。また、対象者の平均年齢は38.9歳（SD=4.3）であった。

職場は、病院や訪問看護ステーション等の臨床の場が71.0%を占め、教育・研究機関は24.5%であった。最終学位は博士前期課程・修士課程修了が47.6%で最も多く、次いで専門学校卒業が23.1%、大学卒業が15.1%、博士後期課程修了が10.3%、短期大学卒業が4.0%であった。専門資格を有しているのは60.1%であり、そのうち専門看護師が46.0%、認定看護師が55.9%であった。

2. 研究活動の状況

1) 研究活動、学術集会での発表経験、論文投稿の経験

(1) 全体【表2】

現在の研究活動について、「行っている」と回答したのは46.7%であり、研究における役割としては、研究代表者/研究責任者は89.6%、研究分担者/共同研究者は54.3%であった。現在行っている研究のタイプは、質的記述的研究が65.9%と最も多く、次いで実態調査研究が44.5%、介入研究が21.3%、相関関係/仮説検証研究が18.9%であった。一方で、研究活動を「行っていない」と回答したのは53.3%であった。

過去の研究活動について、「行ったことがある」と回答したのは63.0%であり、研究における役割としては、研究代表者/研究責任者は86.4%、研究分担者/共同研究者は57.0%であった。過去に行ったことがある研究のタイプは、質的記述的研究が74.7%と最も多く、次いで実態調査研究が45.7%、相関関係/仮説検証研究が24.0%、介入研究が14.0%であった。一方で、研究活動を「行ったことがない」と回答したのは37.0%であった。

研究活動をすすめていくうえで困ったことについて、過去に研究活動を「行ったことがある」と回答した人に対し自由記述で求めたところ、104名から回答が得られた。記述内容から研究活動をすすめていく上で困ったこととして、「臨床で働きながらでは

時間も余裕もない」、「通常業務と私生活をこなしながら研究時間を確保するのは困難」、「業務の時間外にやらなければならないため、休みが取れず疲労した」など、【時間の確保】に関すること 36 件、「研究内容が妥当なものであるか、意味のあるものであるか不安を感じる」、「やり方や考え方があっているのか」、「研究課題の選定」、「研究計画書の作成」、「分析方法の種類や選択の知識がない」、「統計手法や統計学の理解」、「考察の深め方」など【研究の進め方・まとめ方】に関すること 31 件、「フィールドの開拓」、「フィールドとの調整」、「研究のフィールドがない」、「被験者の確保」など【フィールドの確保や調整】に関すること 21 件、「身近に指導者がいない」、「身近に相談できる人が少ない」、「誰に相談すればよいかわからない」、「研究指導受けるために遠方に行く必要がある」など【相談・指導体制】に関すること 20 件、「倫理審査が厳しくなかなか研究活動意欲を持ってない」、「倫理委員会のハードルが高い」、「倫理審査の書類準備」など【倫理審査】に関すること 13 件、「研究にかかる費用の捻出」、「資金は自己負担になる」、「病院で働く看護師には量的研究を行う資金源の確保が困難」など【研究資金】に関すること 12 件、「査読者の求めるレベルに達しておらず、不採択になる」、「査読者からの返答の意図がわからずどのように対応してよいのか分からない」、「カバーレターや対応表」など【論文投稿】に関すること 8 件、「文献検索が容易にできない」、「文献検索や取り寄せは母校の大学に行かなければならない」など【文献検索・文献取り寄せ】に関すること 3 件、「(所属組織の) 研究への理解が乏しい」、「研究仲間を見つけることが難しい」、「研究に対する意欲があまりない」など【その他】9 件が抽出された。

学術集会での発表経験について、「あり」と回答したのは 83.2%であり、そのうち、国内学会で筆頭発表者としての経験がある人は 91.4%、共同発表者としての経験がある人は 59.9%、国際学会で筆頭発表者としての経験がある人は 19.2%、共同発表者としての経験がある人は 14.0%であった。一方で、学術集会での発表経験が「なし」と回答したのは 16.8%であった。

日本がん看護学会学術集会での発表経験について、「あり」と回答したのは 63.0%で、そのうち、筆頭発表者としての経験がある人は 86.9%、共同発表者としての経験がある人は 40.7%であった。一方で、日本がん看護学会学術集会での発表経験について、「なし」と回答したのは 37.0%であった。

論文投稿の経験について、「あり」と回答したのは 42.2%であり、そのうち、和文投稿の筆頭著者としての経験がある人は 84.5%、共著者としての経験がある人は 54.7%、英文投稿の筆頭著者としての経験がある人は 27.7%、共著者としての経験がある人は 25.0%であった。一方で、論文投稿の経験が「なし」と回答したのは 57.8%であった。

日本がん看護学会誌への投稿の経験について、「あり」と回答したのは 16.7%であり、そのうち、筆頭著者としての経験がある人は 76.4%、共著者としての経験がある人は 34.6%であった。一方で、日本がん看護学会誌への投稿の経験が「なし」と回答したのは 84.3%であった。

(2) 対象者の背景別

① 職場別【表 3】

現在の研究活動について「行っている」と回答した人は、教育・研究機関は 94.2%、

病院は 32.1%であり、訪問看護ステーションは全員が「行っていない」と回答した。研究活動を行っている人のうち、研究代表者/研究責任者を担っているのは、教育・研究機関は 90.1%、病院は 89.6%であり、研究分担者/共同研究者を担っているのは、教育・研究機関は 67.9%、病院は 40.3%であった。

過去の研究活動について「行ったことがある」と回答した人は、教育・研究機関は 93.0%、病院は 51.3%、訪問看護ステーションは 55.6%であった。研究活動を行ったことがある人のうち、研究代表者/研究責任者を担っていたのは、教育・研究機関は 92.5%、病院は 82.9%、訪問看護ステーションは 40.0%であり、研究分担者/共同研究者を担っていたのは、教育・研究機関は 67.5%、病院は 48.0%、訪問看護ステーションは 100%の全員であった。

学術集会での発表経験について「あり」と回答した人は、教育・研究機関は 97.7%、病院は 78.3%、訪問看護ステーションは 66.7%であった。学術集会で発表経験がある人のうち、国内学会で筆頭発表者としての経験があったのは、教育・研究機関は 98.8%、病院は 87.8%、訪問看護ステーションは 100%の全員であった。また、国際学会で筆頭発表者としての経験があったのは、教育・研究機関は 50.0%、病院は 5.9%であったが、訪問看護ステーションは 16.7%であった。

日本がん看護学会学術集会での発表経験について「あり」と回答した人は、教育・研究機関は 72.1%、病院は 59.6%、訪問看護ステーションは 55.6%であった。日本がん看護学会学術集会で発表経験がある人のうち、筆頭発表者としての経験があったのは、教育・研究機関は 90.3%、病院は 85.3%、訪問看護ステーションは 80.0%であった。

論文投稿の経験について「あり」と回答した人は、教育・研究機関は 84.9%、病院は 26.7%、訪問看護ステーションは 33.3%であった。論文投稿の経験がある人のうち、和文投稿の筆頭著者としての経験があったのは、教育・研究機関は 87.7%、病院は 81.3%、訪問看護ステーションは 100%の全員であった。また、英文投稿で筆頭発表者としての経験があったのは、教育・研究機関は 45.2%、病院は 10.9%であったが、訪問看護ステーションはいなかった。

日本がん看護学会誌への投稿の経験について「あり」と回答した人は、教育・研究機関は 34.9%、病院は 9.6%、訪問看護ステーションは 11.1%の 1 名のみであった。日本がん看護学会誌への投稿経験がある人のうち、筆頭著者としての経験があったのは、教育・研究機関は 76.7%、病院は 78.3%であったが、訪問看護ステーションはいなかった。

② 最終学位別【表 4】

現在の研究活動について「行っている」と回答した人は、博士後期課程修了者は 94.4%、博士前期課程・修士課程修了者は 54.5%、大学卒業者は 35.8%、短期大学卒業者は 14.3%、専門学校卒業者は 22.2%であった。研究活動を行っている人のうち、研究代表者/研究責任者を担っているのは、博士後期課程修了者は 97.1%、博士前期課程・修士課程修了者は 91.2%、大学卒業者は 78.9%、短期大学卒業者は 100%の全員、専門学校卒業者は 77.8%であり、研究分担者/共同研究者を担っているのは、博士後期課程修了者は 76.5%、博士前期課程・修士課程修了者は 53.8%、大学卒業者は 42.1%、

短期大学卒業者は0%，専門学校卒業者は33.3%であった。

過去の研究活動について「行ったことがある」と回答した人は，博士後期課程修了者は100%の全員，博士前期課程・修士課程修了者は80.8%，大学卒業者は41.5%，短期大学卒業者は35.7%，専門学校卒業者は28.4%であった。研究活動を行ったことがある人のうち，研究代表者/研究責任者を担っていたのは，博士後期課程修了者は91.7%，博士前期課程・修士課程修了者は91.9%，大学卒業者は68.2%，短期大学卒業者は80.0%，専門学校卒業者は65.2%であり，研究分担者/共同研究者を担っていたのは，博士後期課程修了者は86.1%，博士前期課程・修士課程修了者は48.9%，大学卒業者は63.6%，短期大学卒業者は40.0%，専門学校卒業者は56.5%であった。

学術集会での発表経験について「あり」と回答した人は，博士後期課程修了者は100%の全員，博士前期課程・修士課程修了者は91.6%，大学卒業者は77.4%，短期大学卒業者は64.3%，専門学校卒業者は65.4%であった。学術集会で発表経験がある人のうち，国内学会で筆頭発表者としての経験があったのは，博士後期課程修了者は100%の全員，博士前期課程・修士課程修了者は95.4%，大学卒業者は82.9%，短期大学卒業者は88.9%，専門学校卒業者は81.1%であった。また，国際学会で筆頭発表者としての経験があったのは，博士後期課程修了者は75.0%，博士前期課程・修士課程修了者は19.0%であり，大学卒業生，短期大学卒業生，専門学校卒業生はいなかった。

日本がん看護学会学術集会での発表経験について「あり」と回答した人は，博士後期課程修了者は77.8%，博士前期課程・修士課程修了者は71.9%，大学卒業者は60.4%，短期大学卒業者は35.7%，専門学校卒業者は44.4%であった。日本がん看護学会学術集会で発表経験がある人のうち，筆頭発表者としての経験があったのは，博士後期課程修了者は89.3%，博士前期課程・修士課程修了者は93.3%，大学卒業者は78.1%，短期大学卒業者は80.0%，専門学校卒業者は72.2%であった。

論文投稿の経験について「あり」と回答した人は，博士後期課程修了者は100%の全員，博士前期課程・修士課程修了者は52.7%，大学卒業者は24.5%，短期大学卒業者は21.4%，専門学校卒業者は9.9%であった。論文投稿の経験がある人のうち，和文投稿の筆頭著者としての経験があったのは，博士後期課程修了者は88.9%，博士前期課程・修士課程修了者は90.9%，大学卒業者は61.5%，短期大学卒業者は33.3%，専門学校卒業者は50.0%であった。また，英文投稿で筆頭発表者としての経験があったのは，博士後期課程修了者は77.8%，博士前期課程・修士課程修了者は13.6%，短期大学卒業者は33.3%であり，大学卒業生と専門学校卒業生はいなかった。

日本がん看護学会誌への投稿の経験について「あり」と回答した人は，博士後期課程修了者は47.2%，博士前期課程・修士課程修了者は17.4%，大学卒業者は9.4%，専門学校卒業者は4.9%であり，短期大学卒業生はいなかった。日本がん看護学会誌への投稿経験がある人のうち，筆頭著者としての経験があったのは，博士後期課程修了者は70.6%，博士前期課程・修士課程修了者は82.8%，大学卒業者は80.0%，専門学校卒業者は50.0%であった。

③ 専門資格の有無別【表5】

現在の研究活動について「行っている」と回答した人は，専門資格ありは31.8%，

専門資格なしは 69.3%であった。研究活動を行っている人のうち、研究代表者/研究責任者を担っているのは、専門資格ありは 85.1%、専門資格なしは 92.8%であり、研究分担者/共同研究者を担っているのは、専門資格ありは 49.3%、専門資格なしは 57.7%であった。

過去の研究活動について「行ったことがある」と回答した人は、専門資格ありは 52.1%、専門資格なしは 79.3%であった。研究活動を行ったことがある人のうち、研究代表者/研究責任者を担っていたのは、専門資格ありは 84.5%、専門資格なしは 88.3%であり、研究分担者/共同研究者を担っていたのは、専門資格ありは 51.8%、専門資格なしは 62.2%であった。

学術集会での発表経験について「あり」と回答した人は、専門資格ありは 77.3%、専門資格なしは 92.1%であった。学術集会で発表経験がある人のうち、国内学会で筆頭発表者としての経験があったのは、専門資格ありは 89.0%、専門資格なしは 94.6%であった。また、国際学会で筆頭発表者としての経験があったのは、専門資格ありは 8.6%、専門資格なしは 32.6%であった。

日本がん看護学会学術集会での発表経験について「あり」と回答した人は、専門資格ありは 56.9%、専門資格なしは 72.1%であった。日本がん看護学会学術集会で発表経験がある人のうち筆頭発表者としての経験があったのは、専門資格ありは 87.5%、専門資格なしは 86.1%であった。

論文投稿の経験について「あり」と回答した人は、専門資格ありは 31.3%、専門資格なしは 58.6%であった。論文投稿の経験がある人のうち、和文投稿の筆頭著者としての経験があったのは、専門資格ありは 77.3%、専門資格なしは 90.2%であった。また、英文投稿で筆頭発表者としての経験があったのは、専門資格ありは 12.1%、専門資格なしは 40.2%であった。

日本がん看護学会誌への投稿の経験について「あり」と回答した人は、専門資格ありは 10.4%、専門資格なしは 23.6%であった。日本がん看護学会誌への投稿経験がある人のうち、筆頭著者としての経験があったのは、専門資格ありは 72.7%、専門資格なしは 78.8%であった。

2) 研究活動への関心度【図 1】

(1) 全体【表 6】

「非常に関心がある」と回答した人は 37.3%、「やや関心がある」と回答した人は 44.2%であり、80%以上の回答者が研究活動に関心を持っていた。

(2) 対象者の背景別

① 職場別【表 7】

「非常に関心がある」「やや関心がある」と回答した人は、教育・研究機関は 98.9%であり、臨床現場である病院は 76.7%、訪問看護ステーションは 66.6%であった。

② 最終学位別【表 8】

「非常に関心がある」「やや関心がある」と回答した人は、博士後期課程修了者は

100%，博士前期課程・修士課程修了者は 89.2%，大学卒業者は 67.9%，短期大学卒業者は 50.0%，専門学校卒業者は 71.6%であった。

③ 専門資格の有無別【表 9】

「非常に興味がある」「やや興味がある」と回答した人は、専門資格ありは 76.8%，専門資格なしは 88.5%であった。

(3) 関心度が低い理由

研究活動への関心度について「どちらともいえない」「あまり関心がない」「全く関心がない」と回答した人に対し、その理由を自由記述で求めたところ、59名から回答が得られた。

記述内容から研究活動への関心が低い理由として、「手当なども出ず、勤務外の拘束時間が多いためメリットを感じない」、「実務で時間的にも体力的にも余裕がない」、「育児が忙しく、研究するまでの時間を持てる余裕がない」、「残業や自宅で仕事をする時間が増えてしまう」など【時間が確保できず負担が大きい】が 48 件、「以前に研究に参加したことで自身の実力の程度を感じ、新たに研究に携わりたいという気持ちはない」、「研究能力に自信がない」など【研究を行う自信がない】が 4 件、「何をすればよいか思いつかない」、「明らかにしたい研究疑問がない」など【研究疑問を思いつかない】が 3 件、「研究指導者がいない」、「オブザーバーがいない」など【相談者や指導者が身近にいない】が 3 件、「実践をしたいから」、「看護実践と研究が自分の中でリンクしてこない」の【実践と研究がリンクしない】が 2 件、「どのように進めればよいか分からない」など【研究の進め方が分からない】が 2 件、「誰かと一緒にであれば頑張れそうだが、周りにそういう人がいない」など【周りに研究する仲間がいない】が 2 件、「看護部の意向に沿わない研究はできない」、「十分な協力を施設から得ることができない」の【所属組織の協力が得られない】が 2 件、「研究費用の支援が得られない」、「研究をどのように継続していくか具体的なイメージが持てない」など【その他】3 件が抽出された。

3. 学会に求める研究活動支援

1) 全体【表 10】【図 2】

(1) 研究に関する知識や技術の提供

「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人が最も多かった項目は、「研究に関するセミナーをいつでも学会 Web ページで閲覧できるシステムの構築」(84.0%)、次いで「研究の方法論や分析方法に関するセミナーの開催」(72.9%)、「研究計画の相談や指導が受けられるシステムの構築」(68.1%)、「日本語論文の書き方についてのセミナーの開催」(57.3%)、「最先端の研究に関するセミナーの開催」(53.6%)であり、これらの項目については、50%以上の回答者が支援を希望していた。一方で、最も少なかった項目は「英語論文の書き方についてのセミナーの開催」(29.3%)であった。

① 研究計画の相談や指導が受けられるシステムの構築

「非常に行ってほしい」「行ってほしい」「どちらかといえば行ってほしい」と回答し

た人に対し、具体的に相談や指導を受けたい内容を自由記述で求めたところ、217名から回答が得られた。

記述内容から研究計画について相談や指導を受けたい内容として、「研究計画内容の妥当性の確認」、「研究計画書作成の支援」、「研究の組み立て方」など【研究計画立案】が44件、「量的研究に関する相談」、「質的研究の方法」、「事例・実践研究の助言」、「リサーチクエスションに合わせた研究方法」など【研究方法】が40件、「研究プロセス全ての段階で相談にのってもらいたい」、「研究の初めから終わりまでの全般的な指導」、「研究的視点の助言と並行して心理的負担のサポート」、「定期的な助言、指導」など【研究プロセス全体】が36件抽出された。さらに、具体的な内容として、「クリニカルクエスションが研究課題として妥当かどうか」、「リサーチクエスションの作り方」、「研究テーマの焦点の絞り方」、「臨床の看護を研究につなげていく過程」など【研究テーマ・リサーチクエスション】にすることが40件、「研究デザインの選択」、「研究デザインの妥当性」など【研究方法：研究デザインの選択】にすることが4件、「調査フィールドに関する助言」、「サンプル数確保のためのルート」、「サンプルサイズ」、「インタビューガイドのスーパーバイズ」、「データのとり方」など【研究方法：データ収集】にすることが17件、「倫理的配慮について」など【研究方法：倫理的配慮】にすることが4件、「分析方法が妥当か」、「分析方法の選び方」、「分析結果が適切か」、「統計解析について」、「質的データの分析」など【研究方法：分析】にすることが71件抽出された。また、「文献検索から論文クリティークまで」、「文献検討が正しいのか」、「文献検索の方法」など【文献検索・クリティーク】にすることが4件、「倫理審査申請書作成に関する相談」、「倫理審査の対策」、「倫理審査をどこに依頼するか」など【倫理審査の申請】にすることが8件、「研究助成金獲得のアドバイス」など【研究費獲得】が2件抽出された。

研究計画に関する内容以外として、「結果のまとめ方」、「考察の方向性」など【結果・考察のまとめ方】15件、「論文の書き方」、「文章の添削」、「査読内容に関する相談」など【論文作成・論文投稿】16件、【抄録やポスター作成】1件についても記述されていた。

② 研究の方法論や分析方法に関するセミナーの開催

「非常に行ってほしい」「行ってほしい」「どちらかといえば行ってほしい」と回答した308名に対し、希望するセミナーの開催方法について回答を求めたところ、「対面開催」が3.6%、「web開催」が63.2%、「どちらでもよい」が33.2%であった。さらに、具体的に行って欲しいセミナーの内容を自由記述で求めたところ、171名から回答が得られた。

記述内容から研究の方法論や分析方法に関して欲しいセミナーの内容として、「基礎から応用まで」、「どういう研究内容ではどういう研究方法がよいか」、「多様な方法論」など【研究方法】が24件、「看護研究の進め方」、「研究の仕方」、「研究の始め方」など【研究の進め方】が21件、「研究計画書の記載ポイント」、研究計画書の書き方、「論理的な企画書の書き方」など【研究計画書の作成】が13件抽出された。さらに、研究方法の具体的な種類として、【量的研究】9件、【質的研究】9件、【文献研究】5件、【ミ

ックスメソッド】3件、【介入研究】3件、【アクションリサーチ】3件、【事例研究】2件、【実装研究】2件が抽出された。また、「日常の実践を研究につなげるための工夫」、「臨床疑問を研究にするための相談」、「研究テーマの選定方法」など【研究テーマ・リサーチクエスト】が9件、「文献検索・検討」、「文献の読み方」など【文献検索・クリティーク】が6件、「研究対象者のリクルートの方法」、「アンケートの作成方法」、「インタビュー手法」など【データ収集方法】が6件、「研究テーマに適切な分析方法」、「分析の具体的な方法」、「データの扱い方」など【分析方法】が19件抽出され、分析方法の具体としては、【統計解析】が61件、【質的データ分析】が19件抽出された。また、「がん看護研究のトレンド」、「話題のトピックス」、「最近の動向」など【がん看護研究のトレンド】が3件みられた。

研究の方法論や分析方法に関する内容以外としては、【倫理審査の申請】3件、【論文作成・論文投稿】7件、【学会発表の方法】2件、【結果のまとめ方】1件、【研究費獲得】1件についても記述されていた。

③ 日本語論文の書き方についてのセミナーの開催

「非常に行ってほしい」「行ってほしい」「どちらかといえば行ってほしい」と回答した272名に対し、希望するセミナーの開催方法について回答を求めたところ、「対面開催」が4.8%、「web開催」が57.8%、「どちらでもよい」が37.4%であった。さらに、具体的に行って欲しいセミナーの内容を自由記述で求めたところ、104名から回答が得られた。

記述内容から日本語論文の書き方について行って欲しいセミナーの内容として、「論文を書く上での約束事」、「書き方のお作法」、「学術論文に適した/不適切な表現」など【論文作成におけるルール（書き方の作法）】が26件、「基本が知りたい」、「論文の組み立て」、「論文執筆に関するベーシックな内容」など【論文の書き方の基礎】13件、「質の高い論文とはどういうものか」、「採択につながる論文の書き方」、「原著で採択されるためのコツ」、「学会誌が求める基準」など【採択される論文の書き方】が12件、「論文の構成」、「論文に記載する内容」など【論文の構成とその内容】が8件、「どこからどうやって書き始めて完成にこぎつけるのか」、「具体的な進め方について」など【具体的な進め方】が4件、【研究方法にそったまとめ方】が1件抽出された。さらに、具体的な書き方として、「考察の深め方」、「考察を書くための準備」、「考察の記載方法」など【考察を書くポイント】が9件、「論理的な文章構成」、「論理的な文章のまとめかた」、「論文としての首尾一貫した文章構成」など【論理の一貫性】が7件、「投稿までの流れ」、「投稿の概要や注意点」、「査読について」、「エディターとのやり取り」など【論文投稿の流れ】が6件、【抄録/要旨の書き方】3件、【緒言/序論の書き方】3件、【結果の書き方】2件、【図表の作成方法】2件、【文献引用・引用文献の書き方】2件が抽出された。

また、セミナー形式ではなく、「自分が書いたものに対し、アドバイスがもらえるとよい」、「自分の書いているものの添削」など【個別的なアドバイスが欲しい】といった意見が5件みられた。

④ 英語論文の書き方についてのセミナーの開催

「非常に行ってほしい」「行ってほしい」「どちらかといえば行ってほしい」と回答した 185 名に対し、希望するセミナーの開催方法について回答を求めたところ、「対面開催」が 3.8%、「web 開催」が 61.0%、「どちらでもよい」が 35.2%であった。

⑤ 最先端の研究に関するセミナーの開催

「非常に行ってほしい」「行ってほしい」「どちらかといえば行ってほしい」と回答した 265 名に対し、希望するセミナーの開催方法について回答を求めたところ、「対面開催」が 3.8%、「web 開催」が 58.9%、「どちらでもよい」が 37.3%であった。さらに、具体的に行って欲しいセミナーの内容を自由記述で求めたところ、89 名から回答が得られた。

記述内容から最先端の研究に関して欲しいセミナーの内容として、「最近の研究の動向や新しい知見」、「最先端の研究がどのようなものか」、「最新の研究トピックス」など【研究の動向・トピック】が 22 件、「海外の最新の論文」、「先進国で行われているがん看護研究のトピック」、「海外の研究トレンド」など【海外の研究の動向・トピック】が 11 件、「新たなリサーチ手法」、「最先端の研究手法に関する動向や特徴」など【研究方法】が 9 件抽出された。セミナーで取り上げて欲しい研究方法の具体としては、【ミックスメソッド】2 件、【事例研究】3 件、【実装研究】2 件、【介入研究】1 件、【内容分析】1 件、【現象学的記述研究】1 件、【ナラティブ研究】1 件、【空間分析】1 件、【他学問・他領域の手法の活用】1 件が抽出された。また、関心分野としては、【がん看護全般】6 件、【海外のがん看護診療】2 件、【がん薬物療法】4 件、【遺伝情報・遺伝子解析】2 件、【がん放射線療法】1 件、【緩和ケア】1 件、【外来治療】1 件、【がんと併存疾患】1 件、【ACP】1 件、【地域・在宅看護】1 件、【看護教育】1 件、【研究機関と臨床現場のコラボレーション】1 件が抽出された。さらに、「がん看護の領域で AI や IoT を活用した研究」、「デジタルトランスフォーメーション」、「ICT を活かして効率よく研究できる方法論」など【AI や IoT の研究への活用】が 8 件、「統計ソフトや文献管理ソフトなど役立つソフトについて」など【研究に活用できるソフトウェア】が 2 件、【real-word date の研究への活用】が 1 件抽出された。

(2) 研究活動のためのネットワーク作り

「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人が最も多かった項目は、「所属する地区で、がん看護の実践家と交流ができる場の構築（交流会の開催、メーリングリスト・SNS の活用など）」(57.3%)、次いで「所属する地区で、がん看護の研究者と交流ができる場の構築（交流会の開催、メーリングリスト・SNS の活用など）」(52.7%)、「全国レベルで、がん看護の実践家と交流ができる場の構築（交流会の開催、メーリングリスト・SNS の活用など）」(50.4%)、「全国レベルで、がん看護の研究者と交流ができる場の構築（交流会の開催、メーリングリスト・SNS の活用など）」(48.4%)であり、いずれの項目も 50%程度の回答者が支援を希望していた。

(3) 学術活動・研究活動の促進

「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人が最も多かった項目は、「若手の研究者や看護実践家への研究助成」(61.5%)、次いで「若手の研究者や看護実践家が参加できる学会主導の研究プロジェクトの実施」(57.3%)、「若手の研究者や看護実践家を対象とした学会発表・投稿論文の表彰」(49.3%)であった。

(4) その他、研究活動に関して学会で行ってほしい支援

その他、研究活動に関して学会で行って欲しい支援について自由記述で求めたところ、29名から回答が得られた。その内容として、「研究活動時間の確保について、医療現場に働きかけを行って欲しい」、「研究に打ち込める研究環境の実現が、統合イノベーション戦略 2023（2023年6月9日閣議決定）に課題として挙げられている。学会としてもこの課題に対する支援（活動）をしてほしい」、「CNSの更新に必要な研究のポイントを5年で50貯めるのが非常に大変であり、何かそこに関連する支援が欲しい」、「学会とつながることで、どこに勤めてもある程度の教育研究に携われる環境があるといい」、「大学の先生からご教授頂けるシステムがあると研究の相談がしやすい」、「研究者と研究指導者のマッチング」、「研究の進め方や発表のまとめ方などのアドバイスをチャット等で相談できるツールがあると嬉しい」、「〇〇研究に精通しており、助言が可能な研究者一覧などあれば、連絡しやすい」、「大規模研究としてデザインや方法論は研究機関が担い、実臨床の看護師はそれをもとに研究できるシステムがあってもいいと思う」、「がん看護学会か看護協会のホームページで、無料で文献検索ができるとか、過去の抄録を閲覧できるとか、がん看護の雑誌に掲載されたような論文を閲覧できるなどしてくれたらありがたい」、「研究フィールドの確保や橋渡しをお願いしたい」、「研究不正に対する告発システムの運営」、「研究助成金をより多くの研究者が獲得できるよう支援してほしい」、「若手への支援と同時に、若手以降の対象にも支援があると大変ありがたい」、「英文誌の発行」などの意見があった。

さらに、「若手の定義を年齢で区切るのではなく、研究開始から又は研究機関着任からの年数で区切ってほしい」という意見もみられた。

2) 対象の背景別

(1) 研究に関する知識や技術の提供

① 研究計画の相談や指導が受けられるシステムの構築【表11】【図3】

職場別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、教育・研究機関は61.6%、臨床現場の病院は69.6%、訪問看護ステーションは77.8%であった。いずれの職場においても60%以上の回答者が学会の支援を希望していたが、教育・研究機関に比べ、臨床現場に所属する人の方が多い傾向にあった。

最終学位別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、博士後期課程修了者は44.4%、博士前期課程・修士課程修了者は72.5%、大学卒業者は66.0%、短期大学卒業者は85.7%、専門学校卒業者は67.9%であり、博士後期課程修了者を除く回答者の約70～85%が学会の支援を希望していた。

専門資格の有無別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、専門資格ありは71.6%、専門資格なしは62.9%であり、資格の有無にかかわらず60%以上の回答者が学会の支援を希望していたが、専門資格のある人の方が多い傾向にあった。

② 研究の方法論や分析方法に関するセミナーの開催【表12】【図4】

職場別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、教育・研究機関は75.6%、臨床現場の病院は71.7%、訪問看護ステーションは66.7%であった。いずれの職場においても65%以上の回答者が学会の支援を希望していたが、臨床現場に比べ、教育・研究機関に所属する人の方がやや多い傾向にあった。

最終学位別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、博士後期課程修了者は61.1%、博士前期課程・修士課程修了者は77.8%、大学卒業者は67.9%、短期大学卒業者は85.7%、専門学校卒業者は69.1%であった。いずれの最終学位においても60%以上の回答者が学会の支援を希望していたが、特に博士後期課程修了者を除く人が約70~85%と多い傾向にあった。

専門資格の有無別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、専門資格ありは73.9%、専門資格なしは71.4%であり、資格の有無にかかわらず70%程度の回答者が学会の支援を希望していた。

③ 日本語論文の書き方についてのセミナーの開催【表13】【図5】

職場別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、教育・研究機関は48.8%、臨床現場の病院は61.7%、訪問看護ステーションは44.4%であり、特に病院に所属する人が約60%程度と多い傾向にあった。

最終学位別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、博士後期課程修了者は38.9%、博士前期課程・修士課程修了者は59.3%、大学卒業者は50.9%、短期大学卒業者は78.6%、専門学校卒業者は61.7%であり、博士後期課程修了者を除く回答者の50%以上が学会の支援を希望していた。

専門資格の有無別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、専門資格ありは60.7%、専門資格なしは52.1%であり、資格の有無にかかわらず50%以上の回答者が学会の支援を希望していたが、専門資格のある人の方がやや多い傾向にあった。

④ 英語論文の書き方についてのセミナーの開催【表14】【図6】

職場別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、教育・研究機関は61.6%、臨床現場の病院は16.3%、訪問看護ステーションは11.1%であった。教育研究機関は60%以上の回答者が学会の支援を希望していたが、臨床現場に所属する人の方の希望者は20%未満であった。

最終学位別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、博士後期課程修了者は50.0%、博士前期課程・修士課程修了者は40.7%、大学卒業者は15.1%、短期大学卒業者は21.4%、専門学校卒業者は7.4%であった。博士後期課程や

博士前期課程・修士課程といった大学院修了者は、約 40～50%が学会の支援を希望していたが、それ以外の最終学位では、学会の支援の希望する人は少ない傾向にあった。

専門資格の有無別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、専門資格ありは 17.5%，専門資格なしは 47.1%であった。資格の有無にかかわらず学会の支援を希望する人は 50%未満であったが、特に専門資格のある人の方が 20%未満と少なかった。

⑤ 最先端の研究に関するセミナーの開催【表 15】【図 7】

職場別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、教育・研究機関は 68.6%，臨床現場の病院は 47.9%，訪問看護ステーションは 55.6%であり、臨床現場に所属する人に比べ、教育・研究機関に所属する人の方が多傾向にあった。

最終学位別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、博士後期課程修了者は 72.2%，博士前期課程・修士課程修了者は 58.7%，大学卒業者は 43.4%，短期大学卒業者は 50.0%，専門学校卒業者は 42.0%であり、博士後期課程や博士前期課程・修士課程といった大学院修了者の約 60%以上が学会の支援を希望していた。

専門資格の有無別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、専門資格ありは 49.8%，専門資格なしは 59.3%であり、専門資格のない人の方が多傾向にあった。

⑥ 研究に関するセミナーをいつでも学会 Web ページで閲覧できるシステムの構築【表 16】【図 8】

職場別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、教育・研究機関は 83.7%，臨床現場の病院は 84.6%，訪問看護ステーションは 77.8%であった。いずれの職場においても 80%程度の回答者が学会の支援を希望していた。

最終学位別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、博士後期課程修了者は 77.8%，博士前期課程・修士課程修了者は 88.6%，大学卒業者は 83.0%，短期大学卒業者は 78.6%，専門学校卒業者は 79.0%であり、最終学位にかかわらず 70%以上の回答者が学会の支援を希望していた。

専門資格の有無別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、専門資格ありは 84.8%，専門資格なしは 82.9%であり、資格の有無にかかわらず 80%以上の回答者が学会の支援を希望していた。

(2) 研究活動のためのネットワーク作り

⑦ 所属する地区で、がん看護の研究者と交流ができる場の構築（交流会の開催、メーリングリスト・SNS の活用など）【表 17】【図 9】

職場別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、教育・研究機関は 55.8%，臨床現場の病院は 53.8%，訪問看護ステーションは 55.6%であった。いずれの職場においても 55%程度の回答者が学会の支援を希望していた。

最終学位別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、博士

後期課程修了者は 52.8%，博士前期課程・修士課程修了者は 58.1%，大学卒業者は 39.6%，短期大学卒業者は 35.7%，専門学校卒業者は 53.1%であり，博士後期課程や博士前期課程・修士課程といった大学院修了者と専門学校卒業者は，50%以上の回答者が学会の支援を希望していた。

専門資格の有無別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は，専門資格ありは 52.1%，専門資格なしは 53.6%であり，資格の有無にかかわらず 50%程度の回答者が学会の支援を希望していた。

⑧ 所属する地区で，がん看護の実践家と交流ができる場の構築（交流会の開催，メーリングリスト・SNS の活用など）【表 18】【図 10】

職場別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は，教育・研究機関は 62.8%，臨床現場の病院は 56.7%，訪問看護ステーションは 55.6%であった。いずれの職場においても 55%以上の回答者が学会の支援を希望しており，教育・研究機関に所属する人の方が臨床現場に所属する人より，やや多い傾向にあった。

最終学位別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は，博士後期課程修了者は 66.7%，博士前期課程・修士課程修了者は 64.1%，大学卒業者は 43.4%，短期大学卒業者は 28.6%，専門学校卒業者は 53.1%であり，博士後期課程や博士前期課程・修士課程といった大学院修了者と専門学校卒業者は，50%以上の回答者が学会の支援を希望していた。

専門資格の有無別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は，専門資格ありは 56.9%，専門資格なしは 57.9%であり，資格の有無にかかわらず 60%程度の回答者が学会の支援を希望していた。

⑨ 全国レベルで，がん看護の研究者と交流ができる場の構築（交流会の開催，メーリングリスト・SNS の活用など）【表 19】【図 11】

職場別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は，教育・研究機関は 53.5%，臨床現場の病院は 49.2%，訪問看護ステーションは 22.2%であり，教育・研究機関に所属する人の方が臨床現場に所属する人に比べ，多い傾向にあった。

最終学位別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は，博士後期課程修了者は 52.8%，博士前期課程・修士課程修了者は 55.1%，大学卒業者は 32.1%，短期大学卒業者は 28.6%，専門学校卒業者は 46.9%であり，博士後期課程や博士前期課程・修士課程といった大学院修了者は，50%以上の回答者が学会の支援を希望していた。

専門資格の有無別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は，専門資格ありは 48.3%，専門資格なしは 48.6%であり，資格の有無にかかわらず 50%程度の回答者が学会の支援を希望していた。

⑩ 全国レベルで，がん看護の実践家と交流ができる場の構築（交流会の開催，メーリングリスト・SNS の活用など）【表 20】【図 12】

職場別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、教育・研究機関は 57.0%，臨床現場の病院は 50.8%，訪問看護ステーションは 22.2%であり、教育・研究機関に所属する人の方が臨床現場に所属する人に比べ、多い傾向にあった。

最終学位別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、博士後期課程修了者は 61.1%，博士前期課程・修士課程修了者は 55.1%，大学卒業者は 37.7%，短期大学卒業者は 28.6%，専門学校卒業者は 48.1%であり、博士後期課程や博士前期課程・修士課程といった大学院修了者は、50%以上の回答者が学会の支援を希望していた。

専門資格の有無別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、専門資格ありは 50.7%，専門資格なしは 50.0%であり、資格の有無にかかわらず 50%程度の回答者が学会の支援を希望していた。

(3) 学術活動・研究活動の促進

① 若手の研究者や看護実践家が参加できる学会主導の研究プロジェクトの実施 【表 21】【図 13】

職場別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、教育・研究機関は 62.8%，臨床現場の病院は 56.7%，訪問看護ステーションは 33.3%であった。教育・研究機関や病院に所属する回答者の 55~60%程度が学会の支援を希望しており、臨床現場に比べ教育・研究機関に所属する人の方がやや多い傾向にあった。

最終学位別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、博士後期課程修了者は 61.1%，博士前期課程・修士課程修了者は 66.5%，大学卒業者は 37.7%，短期大学卒業者は 28.6%，専門学校卒業者は 54.3%であり、博士後期課程や博士前期課程・修士課程といった大学院修了者は、60~70%程度の回答者が学会の支援を希望していた。

専門資格の有無別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、専門資格ありは 57.8%，専門資格なしは 56.4%であり、資格の有無にかかわらず 60%程度の回答者が学会の支援を希望していた。

② 若手の研究者や看護実践家への研究助成【表 22】【図 14】

職場別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、教育・研究機関は 68.6%，臨床現場の病院は 59.2%，訪問看護ステーションは 33.3%であった。教育・研究機関や病院に所属する 55%以上の回答者が学会の支援を希望しており、臨床現場に比べ教育・研究機関に所属する人の方が多い傾向にあった。

最終学位別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、博士後期課程修了者は 69.4%，博士前期課程・修士課程修了者は 73.7%，大学卒業者は 34.0%，短期大学卒業者は 50.0%，専門学校卒業者は 53.1%であり、博士後期課程や博士前期課程・修士課程といった大学院修了者は、70%程度の回答者が学会の支援を希望していた。

専門資格の有無別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、専門資格ありは 58.8%，専門資格なしは 65.7%であった。資格の有無にかかわら

ず 55%以上の回答者が学会の支援を希望していたが、専門資格のない人の方が専門資格のある人に比べ、多い傾向にあった。

⑬ 若手の研究者や看護実践家を対象とした学会発表・投稿論文の表彰【表 23】【図 15】

職場別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、教育・研究機関は 59.3%，臨床現場の病院は 47.9%，訪問看護ステーションは 11.1%であり、臨床現場に比べ教育・研究機関に所属する人の方が多傾向にあった。

最終学位別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、博士後期課程修了者は 63.9%，博士前期課程・修士課程修了者は 56.3%，大学卒業者は 30.2%，短期大学卒業者は 50.0%，専門学校卒業者は 40.7%であり、博士後期課程や博士前期課程・修士課程といった大学院修了者は、60%程度の回答者が学会の支援を希望していた。

専門資格の有無別において、「非常に行ってほしい」「行ってほしい」と回答した人は、専門資格ありは 45.5%，専門資格なしは 55.0%であり、専門資格のない人の方が専門資格のある人に比べ、多い傾向にあった。

V. まとめ

今回、日本がん看護学会に所属する 45 歳未満の会員を対象とした研究活動支援のニーズ調査を行い、回答率は 27.0%であった。日本看護科学学会が 2013 年に実施した 39 歳以下の学会員を対象とした研究活動に関する調査⁴⁾の回答率は 39.7%であり、本調査の回答率はやや低い傾向となった。回答者のうち臨床に所属する者の割合をみると、本調査は 71.0%，日本看護科学学会の調査は 17.7%であり、臨床に所属する者の割合が多いという本学会の特徴が、研究活動支援のニーズ調査の回答率に影響したと考えられる。一方、本調査の回答者のうち、研究活動を現在行っている者は 46.7%，過去に行ったことがある者は 63.0%であり、本調査は、研究活動に関心のある者の回答が反映されていると推察される。

今回の調査で、45 歳未満の会員の研究活動の状況および学会に求める研究活動支援の内容とニーズの程度が明らかとなった。これらの結果から、本学会が若手研究者に対して行う研究活動支援の方向性として、下記のことが考えられる。

1. 研究に関する知識や技術の提供

本調査の結果から、「研究に関するセミナーをいつでも学会 Web ページで閲覧できるシステムの構築」、「研究の方法論や分析方法に関するセミナーの開催」、「研究計画の相談や指導が受けられるシステムの構築」、「日本語論文の書き方についてのセミナーの開催」、「最先端の研究に関するセミナーの開催」は半数以上の回答者が学会での支援を希望しており、若手研究者のニーズが高い内容であるといえる。

研究活動の状況をみると、80%以上の回答者が研究活動に興味があるにも関わらず、研究活動の実施には至っていない現状が明らかとなった。研究活動をすすめていくうえで困ったこと、研究活動への関心度が低い理由のいずれにおいても、多くの回答者が

【時間の確保】の困難さをあげており、研究活動の実施に至らない主な理由の一つになっていた。しかし、臨床業務と研究活動の両立や研究活動時間の確保については、所属組織の方針によるところが大きく、学会での直接的な支援は現実的には難しい。一方で、研究活動をすすめていくうえで困ったことについて、【時間の確保】の次に多かったのは、【研究の進め方・まとめ方】であり、研究計画を立案するまでのノウハウを提供することで、学会員が限られた時間の中であっても、研究を円滑に進めることができる一助となると考える。また、学会で発表経験のある回答者は 80%以上、本学会の学術集会で発表経験のある回答者は 60%以上であったにも関わらず、論文投稿経験は 40%程度、本学会誌の投稿経験は 20%弱であり、研究成果の論文化にまでは至っていない現状が明らかとなった。特に、本学会誌への投稿が少なく、他の学術雑誌に投稿している可能性も推察される。

これらの研究活動の状況をふまえ、「研究の方法論や分析方法に関するセミナーの開催」では、研究活動の基盤となる研究計画立案に必要な基礎的知識や、回答者のニーズの高かった量的研究・質的研究の各方法論に関する web セミナーを開催すること、さらに、「日本語論文の書き方についてのセミナーの開催」では、論文の書き方の基礎に加え、編集委員会と協働し、本学会誌の査読基準をふまえた内容の web セミナーを開催することが、若手研究者の研究活動の後押しとなると考える。さらに、開催したセミナー動画を活用した web コンテンツの開設や、既存のコンテンツへのリンク集のページの開設といった「研究に関するセミナーをいつでも学会 Web ページで閲覧できるシステムの構築」により、時間の確保が困難な臨床に所属する若手研究者にとって、学術雑誌への投稿を目指した質の高い研究活動に取り組むための効果的な支援になると考える。

また、研究活動をすすめていくうえで困ったこととして、多くの回答者が【相談・指導体制】をあげており、「研究計画の相談や指導が受けられるシステムの構築」のニーズの高さにつながっていた。これは、特に臨床に所属する若手研究者にとって重要な課題となっており、若手研究者の研究活動を推進していくためには、学会として何らかの取り組みを行う必要がある。回答者からは、研究者と研究指導者のマッチングや、相談が可能な研究指導者一覧の公開など、具体的な希望が出されていた。まずは学会として取り組み可能な支援として、学術委員会では第 39 回学術集会上において、研究活動の個別相談を企画している。一般的な研究の方法論は web セミナーや学会ホームページに開設した web コンテンツでの e-Learning を推進し、それ以上の研究相談は、学術集会の機会を活用した個別相談を継続していくことで、若手研究者が個別的な困りごとを相談する機会を設けることができると考える。さらに、研究者と研究指導者のマッチングや、相談が可能な研究指導者一覧の公開など、本調査の回答者のニーズに沿った支援についても、実現可能性を検討していく必要がある。

2. 研究活動のためのネットワーク作り

本調査の結果から、「所属する地区で、がん看護の実践家と交流ができる場の構築（交流会の開催、メーリングリスト・SNS の活用など）」、「所属する地区で、がん看護の研究者と交流ができる場の構築（交流会の開催、メーリングリスト・SNS の活用など）」、

「全国レベルで、がん看護の実践家と交流ができる場の構築（交流会の開催、メーリングリスト・SNS の活用など）」、「全国レベルで、がん看護の研究者と交流ができる場の構築（交流会の開催、メーリングリスト・SNS の活用など）」は、いずれの項目も教育・研究機関や臨床の所属に関わらず、50～60%程度の回答者が支援を希望していた。

研究活動への関心度が低い理由に、【研究を行う自信がない】、【相談者や指導者が身近にいない】、【周りに研究する仲間がいない】があげられており、こういった現状が研究活動のためのネットワーク作りのニーズにつながっていると考えられる。

研究活動のための全国レベルでのネットワーク作りでは、第38回と第39回の学術集会において、「研究をやってみたい」と思っている臨床実践者と、「臨床実践者と一緒に研究をしたい」と思う研究者をつなぐジョイントミーティングを学術委員会として企画・開催している。参加者からは好評を得ており、若手研究者の研究活動支援として、学術集会の機会を活用したネットワーク作りの継続が望まれる。また、所属する地区でのネットワーク作りにおいては、地方分科会委員会の活動があることから、地方分科会委員会と協働し、地区別の研究活動ネットワーク作りを推進していくことが可能と考える。さらに、研究活動のネットワーク作りが活発化することで、将来的には日本がん看護学会特別関心活動グループのような、研究活動に関するテーマグループ活動の立ち上げも可能になると考える。

3. 学術活動・研究活動の推進

本調査の結果から、「若手の研究者や看護実践家への研究助成」、「若手の研究者や看護実践家が参加できる学会主導の研究プロジェクトの実施」は60%程度の回答者が、「若手の研究者や看護実践家を対象とした学会発表・投稿論文の表彰」は50%程度の回答者が支援を希望していた。職場別でみると、いずれも研究活動を行っている割合が高い教育・研究機関に所属する回答者のニーズが高かったが、「若手の研究者や看護実践家への研究助成」、「若手の研究者や看護実践家が参加できる学会主導の研究プロジェクトの実施」においては、病院に所属する回答者の60%程度が支援を希望しており、比較的高い支援ニーズをもっていることが明らかとなった。

研究活動をすすめていくうえで困ったこととして、【研究資金】の確保があげられており、特に研究費をもたない臨床に所属する若手研究者にとって「若手の研究者や看護実践家への研究助成」は、研究活動をすすめるうえで重要なニーズであるといえる。一方で、研究助成は本学会ですでに取り組みされている事業であり、2024年度からは研究助成期間を1年から2年に、助成金の金額も1題につき最大100万まで引き上げるなど、学会としても対応を工夫している。さらに、2024年度からは国際学会発表助成事業を開始し、演題1件につき最大15万円を助成することで、国際学会での研究成果の発表を支援している。しかし、両事業ともに応募件数が少ない状況であり、より多くの学会員に応募してもらえるよう、周知活動を継続していくことが必要である。

また、研究活動について病院に所属する回答者の80%弱が関心をもっているにも関わらず、現在研究活動を行っているのは30%程度にとどまっていた。研究活動を進めるうえで困ったこととして、多くの回答者が【研究の進め方・まとめ方】をあげており、さらに、その他の学会に求める支援について、「大規模研究としてデザインや方法論は

研究機関が担い、実臨床の看護師はそれをもとに研究できるシステムがあってもいいと思う」という意見がみられた。これらのことから、病院に所属する若手研究者のなかには、自分が研究チームの中心となって主体的に研究に取り組むというよりは、あらかじめ枠組みが決められた中で他者と協働して研究に取り組んでいくことを望んでいる者もいると推察され、「若手の研究者や看護実践家が参加できる学会主導の研究プロジェクトの実施」のニーズにつながっていたと考えられる。臨床に所属する若手研究者の活動を推進していくためには、参加できる研究プロジェクトの紹介など、研究活動への関心を活動の実際につなげられる機会の提供が効果的であると考えられる。

その他、本調査において、【文献検索・文献取り寄せ】に困っていることも明らかとなった。学術活動・研究活動を推進する支援として、学会員限定で医学中央雑誌など医学関連分野の文献データベースの利用を可能にするなどの検討も必要といえる。

引用文献

- 1) 日本学術会議 若手アカデミー委員会 若手アカデミー活動検討分科会(2011) : 提言 若手アカデミー設置について,
<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-t133-11.pdf>, 2023. 11. 3 検索
- 2) 日本学術会議 健康・生活科学委員会 看護学分科会 (2014) : 提言 ケアの時代を先導する若手看護学研究者の育成,
<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-t193-7.pdf>, 2023. 11. 3 検索.
- 3) 日本がん看護学会 (2021) : 2020 年日本がん看護学会の課題と今後の発展の方向性ー将来構想に関する報告書ー,
<https://jscn.or.jp/outline/img/vision2020.pdf>, 2023. 11. 3 検索.
- 4) 日本看護科学学会 研究・学術情報委員会 (2013) : 若手看護学研究者の研究実施状況に関する調査 報告書,
https://www.jans.or.jp/uploads/files/committee/2013sep_report.pdf, 2023. 11. 3 検索.
- 5) 深堀浩樹, 宮下光令, 大山裕美子ほか (2015) : 若手看護学研究者の研究活動の阻害要因と日本看護科学学会に求める支援の関連要因, 日本看護科学学会誌, 35, 203-214.
- 6) 野村美香, 宮林郁子, 宮脇美保子ほか (2014) : 看護学研究における倫理的環境整備に向けた実態調査 (第 2 報) ー若手研究者の研究倫理審査ならびに利益相反と被験者補償の現状ー, 日本看護科学学会誌, 34, 84-93.
- 7) 岩國亜紀子, 丸尾智実, 綿貫成明ほか (2017) : 若手看護学研究者を対象とした研究および教育活動支援のための研修ニーズ調査, 日本看護科学学会誌, 37, 185-192.
- 8) 仲上豪二郎 (2023) : 若手研究者の活躍にむけてーJANS の取り組みを中心にー, 看護研究, 56(2), 94-101.

- 9) 木戸芳史 (2023) : 日本精神科看護協会の取り組み－臨床主導の看護研究をサポートする－, 看護研究, 56(2), 102-105.
- 10) 増澤祐子 (2023) : 日本助産学会若手研究者活躍推進委員会の取り組み－若手研究者の研究活動の継続を支える工夫－, 看護研究, 56(2), 106-112.
- 11) 吉田美香子, 桑名健太 (2023) : 看護理工学会の取り組み－他分野とコラボできる次世代の育成－, 看護研究, 56(2), 113-121.

表1 対象者の背景

		N=351	
		人数	%
年齢	20～24歳	1	0.3
	25～29歳	8	2.3
	30～34歳	53	15.1
	35～39歳	103	29.3
	40～44歳	186	53.0
職場	教育・研究機関	86	24.5
	病院（がん専門病院、大学病院、一般病院、クリニック/診療所）	240	68.4
	訪問看護ステーション	9	2.6
	現在、仕事をしていない	12	3.4
	その他	4	1.1
所属地区	地区1：北海道	20	5.7
	地区2：青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島	20	5.7
	地区3：千葉、埼玉、茨城、群馬、栃木	48	13.7
	地区4：東京	45	12.8
	地区5：富山、石川、福井、山梨、長野、新潟	20	5.7
	地区6：神奈川、静岡、岐阜、愛知、三重	62	17.7
	地区7：京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山、滋賀	67	19.1
	地区8：岡山、広島、鳥取、島根、山口、香川、徳島、愛媛、高知	37	10.5
	地区9：福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄	32	9.1
現在の職位（複数選択可）	教育・研究機関		
	教授	1	0.3
	准教授	11	3.1
	講師	23	6.6
	助教	45	12.8
	助手	2	0.6
	研究員	4	1.1
	病院・訪問看護ステーション		
	看護部長/所長	1	0.3
	副看護部長	1	0.3
	病棟責任者：師長/科長/課長等	8	2.3
	副師長/主任等	85	23.9
	副主任	1	0.3
	スタッフ	154	43.9
	学生		
	大学院生	26	7.4
	認定看護師教育機関	0	0.0
	その他		
	無職	7	2.0
	最終学位	博士後期課程修了	36
博士前期課程・修士課程修了		167	47.6
大学卒業		53	15.1
短期大学卒業		14	4.0
専門学校卒業		81	23.1
専門資格（複数選択可）	あり	211	60.1
	専門看護師	97	46.0
	がん看護専門看護師	92	43.6
	遺伝看護専門看護師	2	1.0
	放射線看護専門看護師	1	0.5
	在宅看護専門看護師	1	0.5
	小児看護専門看護師	1	0.5
	老人看護専門看護師	1	0.5
	認定看護師	118	55.9
	がん薬物療法看護認定看護師、がん化学療法認定看護師	59	28.0
	がん放射線療法看護認定看護師	10	4.7
	緩和ケア認定看護師、がん性疼痛看護認定看護師	38	18.0
	乳がん看護認定看護師	7	3.3
	皮膚・排泄ケア認定看護師	2	1.0
	摂食・嚥下障害看護認定看護師	1	0.5
その他	1	0.5	
なし	140	39.9	

表2 研究活動の状況（全体）：研究活動，学術集会での発表経験，論文投稿の経験

		N=351	
		人数	%
現在の研究活動	行っている	164	46.7
	研究における役割（複数選択可）		
	研究代表者/研究責任者	147	89.6
	研究分担者/共同研究者	89	54.3
	研究のタイプ（複数選択可）		
	質的記述的研究	108	65.9
	実態調査研究	73	44.5
	相関関係/仮説検証研究	31	18.9
	介入研究	35	21.3
	わからない	0	0.0
その他	15	9.1	
	行っていない	187	53.3
過去の研究活動	行ったことがある	221	63.0
	研究における役割（複数選択可）		
	研究代表者/研究責任者	191	86.4
	研究分担者/共同研究者	126	57.0
	研究のタイプ（複数選択可）		
	質的記述的研究	165	74.7
	実態調査研究	101	45.7
	相関関係/仮説検証研究	53	24.0
	介入研究	31	14.0
	わからない	1	0.5
その他	15	6.8	
	行ったことがない	130	37.0
学術集会での発表経験	あり（複数選択可）	292	83.2
	国内学会で筆頭発表者としての経験がある	267	91.4
	国内学会で共同発表者としての経験がある	175	59.9
	国際学会で筆頭発表者としての経験がある	56	19.2
	国際学会で共同発表者としての経験がある	41	14.0
	なし	59	16.8
日本がん看護学会学術集会での発表経験	あり（複数選択可）	221	63.0
	筆頭発表者としてある	192	86.9
	共同発表者としてある	90	40.7
	なし	130	37.0
論文投稿の経験	あり（複数選択可）	148	42.2
	和文投稿の筆頭著者としての経験がある	125	84.5
	和文投稿の共著者としての経験がある	81	54.7
	英文投稿の筆頭著者としての経験がある	41	27.7
	英文投稿の共著者としての経験がある	37	25.0
	なし	203	57.8
日本がん看護学会誌への投稿経験	あり（複数選択可）	55	16.7
	筆頭著者としてある	42	76.4
	共著者としてある	19	34.6
	なし	296	84.3

表3 研究活動の状況（職場別）：研究活動，学術集会での発表経験，論文投稿の経験

		教育・研究機関 (N=86)		病院 (N=240)		訪問看護ステーション (N=9)		仕事をしない+その他 (N=16)	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
現在の研究活動	行っている	81	94.2	77	32.1	0	0.0	6	37.5
	研究における役割（複数選択可）								
	研究代表者/研究責任者	73	90.1	69	89.6	0	0.0	5	83.3
	研究分担者/共同研究者	55	67.9	31	40.3	0	0.0	3	50.0
過去の研究活動	行っていない	5	5.8	163	67.9	9	100.0	10	62.5
	行ったことがある	80	93.0	123	51.3	5	55.6	13	81.3
	研究における役割（複数選択可）								
	研究代表者/研究責任者	74	92.5	102	82.9	2	40.0	13	100.0
	研究分担者/共同研究者	54	67.5	59	48.0	5	100.0	8	61.5
学術集会での発表経験	行ったことがない	6	7.0	117	48.8	4	44.4	3	18.8
	あり（複数選択可）	84	97.7	188	78.3	6	66.7	14	87.5
	国内学会で筆頭発表者としての経験がある	83	98.8	165	87.8	6	100.0	13	92.9
	国内学会で共同発表者としての経験がある	57	67.9	108	57.4	2	33.3	8	57.1
	国際学会で筆頭発表者としての経験がある	42	50.0	11	5.9	1	16.7	2	14.3
	国際学会で共同発表者としての経験がある	33	39.3	5	2.7	0	0.0	3	21.4
日本がん看護学会学術集会での発表経験	なし	2	2.3	52	27.7	3	33.3	2	12.5
	あり（複数選択可）	62	72.1	143	59.6	5	55.6	11	68.8
	筆頭発表者としてある	56	90.3	122	85.3	4	80.0	10	90.9
	共同発表者としてある	32	51.6	54	37.8	1	20.0	3	27.3
論文投稿の経験	なし	24	27.9	97	40.4	4	44.4	5	31.3
	あり（複数選択可）	73	84.9	64	26.7	3	33.3	8	50.0
	和文投稿の筆頭著者としての経験がある	64	87.7	52	81.3	3	100.0	6	75.0
	和文投稿の共著者としての経験がある	50	68.5	23	35.9	1	33.3	7	87.5
	英文投稿の筆頭著者としての経験がある	33	45.2	7	10.9	0	0.0	1	12.5
	英文投稿の共著者としての経験がある	30	41.1	6	9.4	0	0.0	1	12.5
日本がん看護学会誌への投稿経験	なし	13	15.1	176	73.3	6	66.7	8	50.0
	あり（複数選択可）	30	34.9	23	9.6	1	11.1	1	6.3
	筆頭著者としてある	23	76.7	18	78.3	0	0.0	1	100.0
	共著者としてある	10	33.3	7	30.4	1	100.0	1	100.0
	なし	56	65.1	217	90.4	8	88.9	15	93.8

表4 研究活動の状況（最終学位別）：研究活動，学術集会での発表経験，論文投稿の経験

		博士後期課程修了 (N=36)		博士前期課程・修士課程修了 (N=167)		大学卒業 (N=53)		短期大学卒業 (N=14)		専門学校卒業 (N=81)	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
現在の研究活動	行っている	34	94.4	91	54.5	19	35.8	2	14.3	18	22.2
	研究における役割（複数選択可）										
	研究代表者/研究責任者	33	97.1	83	91.2	15	78.9	2	100.0	14	77.8
	研究分担者/共同研究者	26	76.5	49	53.8	8	42.1	0	0.0	6	33.3
	行っていない	2	5.6	76	45.5	34	64.2	12	85.7	63	77.8
過去の研究活動	行ったことがある	36	100.0	135	80.8	22	41.5	5	35.7	23	28.4
	研究における役割（複数選択可）										
	研究代表者/研究責任者	33	91.7	124	91.9	15	68.2	4	80.0	15	65.2
	研究分担者/共同研究者	31	86.1	66	48.9	14	63.6	2	40.0	13	56.5
	行ったことがない	0	0.0	32	19.2	31	58.5	9	64.3	58	71.6
学術集会での発表経験	あり（複数選択可）	36	100.0	153	91.6	41	77.4	9	64.3	53	65.4
	国内学会で筆頭発表者としての経験がある	36	100.0	146	95.4	34	82.9	8	88.9	43	81.1
	国内学会で共同発表者としての経験がある	33	91.7	82	53.6	22	53.7	5	55.6	33	62.3
	国際学会で筆頭発表者としての経験がある	27	75.0	29	19.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	国際学会で共同発表者としての経験がある	23	63.9	18	11.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	なし	0	0.0	14	8.4	12	22.6	5	35.7	28	34.6
日本がん看護学会学術集会での発表経験	あり（複数選択可）	28	77.8	120	71.9	32	60.4	5	35.7	36	44.4
	筆頭発表者としてある	25	89.3	112	93.3	25	78.1	4	80.0	26	72.2
	共同発表者としてある	20	71.4	38	31.7	13	40.6	1	20.0	18	50.0
	なし	8	22.2	47	28.1	21	39.6	9	64.3	45	55.6
論文投稿の経験	あり（複数選択可）	36	100.0	88	52.7	13	24.5	3	21.4	8	9.9
	和文投稿の筆頭著者としての経験がある	32	88.9	80	90.9	8	61.5	1	33.3	4	50.0
	和文投稿の共著者としての経験がある	32	88.9	36	40.9	6	46.2	1	33.3	6	75.0
	英文投稿の筆頭著者としての経験がある	28	77.8	12	13.6	0	0.0	1	33.3	0	0.0
	英文投稿の共著者としての経験がある	21	58.3	14	15.9	2	15.4	0	0.0	0	0.0
	なし	0	0.0	79	47.3	40	75.5	11	78.6	73	90.1
日本がん看護学会誌への投稿経験	あり（複数選択可）	17	47.2	29	17.4	5	9.4	0	0.0	4	4.9
	筆頭著者としてある	12	70.6	24	82.8	4	80.0	0	0.0	2	50.0
	共著者としてある	9	52.9	5	17.2	2	40.0	0	0.0	3	75.0
	なし	19	52.8	138	82.6	48	90.6	14	100.0	77	95.1

表5 研究活動の状況（専門資格の有無別）：研究活動，学術集会での発表経験，論文投稿の経験

		専門資格あり (N=211)		専門資格なし (N=140)	
		人数	%	人数	%
現在の研究活動	行っている	67	31.8	97	69.3
	研究における役割（複数選択可）				
	研究代表者/研究責任者	57	85.1	90	92.8
	研究分担者/共同研究者	33	49.3	56	57.7
	行っていない	144	68.2	43	30.7
過去の研究活動	行ったことがある	110	52.1	111	79.3
	研究における役割（複数選択可）				
	研究代表者/研究責任者	93	84.5	98	88.3
	研究分担者/共同研究者	57	51.8	69	62.2
	行ったことがない	101	47.9	29	20.7
学術集会での発表経験	あり（複数選択可）	163	77.3	129	92.1
	国内学会で筆頭発表者としての経験がある	145	89.0	122	94.6
	国内学会で共同発表者としての経験がある	96	58.9	79	61.2
	国際学会で筆頭発表者としての経験がある	14	8.6	42	32.6
	国際学会で共同発表者としての経験がある	12	7.4	29	22.5
	なし	48	22.7	11	7.9
	日本がん看護学会学術集会での発表経験	あり（複数選択可）	120	56.9	101
筆頭発表者としてある	105	87.5	87	86.1	
共同発表者としてある	48	40.0	42	41.6	
	なし	91	43.1	39	27.9
論文投稿の経験	あり（複数選択可）	66	31.3	82	58.6
	和文投稿の筆頭著者としての経験がある	51	77.3	74	90.2
	和文投稿の共著者としての経験がある	28	42.4	53	64.6
	英文投稿の筆頭著者としての経験がある	8	12.1	33	40.2
	英文投稿の共著者としての経験がある	10	15.2	27	32.9
	なし	145	68.7	58	41.4
日本がん看護学会誌への投稿経験	あり（複数選択可）	22	10.4	33	23.6
	筆頭著者としてある	16	72.7	26	78.8
	共著者としてある	8	36.4	11	33.3
	なし	189	89.6	107	76.4

表6 研究活動の状況（全体）：研究活動への関心度

N=351		
	人数	%
非常に関心がある	131	37.3
やや関心がある	155	44.2
どちらともいえない	46	13.1
あまり関心がない	13	3.7
全く関心がない	6	1.7

表7 研究活動の状況（職場別）：研究活動への関心度

	教育・研究機関 (N=86)		病院 (N=240)		訪問看護ステーション (N=9)		仕事をしていない+その他 (N=16)	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
非常に関心がある	57	66.3	66	27.5	3	33.3	5	31.3
やや関心がある	28	32.6	118	49.2	3	33.3	6	37.5
どちらともいえない	1	1.2	40	16.7	2	22.2	3	18.8
あまり関心がない	0	0.0	10	4.2	1	11.1	2	12.5
全く関心がない	0	0.0	6	2.5	0	0.0	0	0.0

表8 研究活動の状況（最終学位別）：研究活動への関心度

	博士後期課程修了 (N=36)		博士前期課程・修士課程修了 (N=167)		大学卒業 (N=53)		短期大学卒業 (N=14)		専門学校卒業 (N=81)	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
非常に関心がある	27	75	80	47.9	9	17.0	2	14.3	13	16.0
やや関心がある	9	25.0	69	41.3	27	50.9	5	35.7	45	55.6
どちらともいえない	0	0.0	16	9.6	8	15.1	5	35.7	17	21.0
あまり関心がない	0	0.0	2	1.2	4	7.5	2	14.3	5	6.2
全く関心がない	0	0.0	0	0.0	5	9.4	0	0.0	1	1.2

表9 研究活動の状況（専門資格の有無別）：研究活動への関心度

	専門資格あり (N=211)		専門資格なし (N=140)	
	人数	%	人数	%
非常に関心がある	59	28.0	72	51.4
やや関心がある	103	48.8	52	37.1
どちらともいえない	37	17.5	9	6.4
あまり関心がない	10	4.7	3	2.1
全く関心がない	2	0.9	4	2.9

図1 研究活動の状況：研究活動への関心度

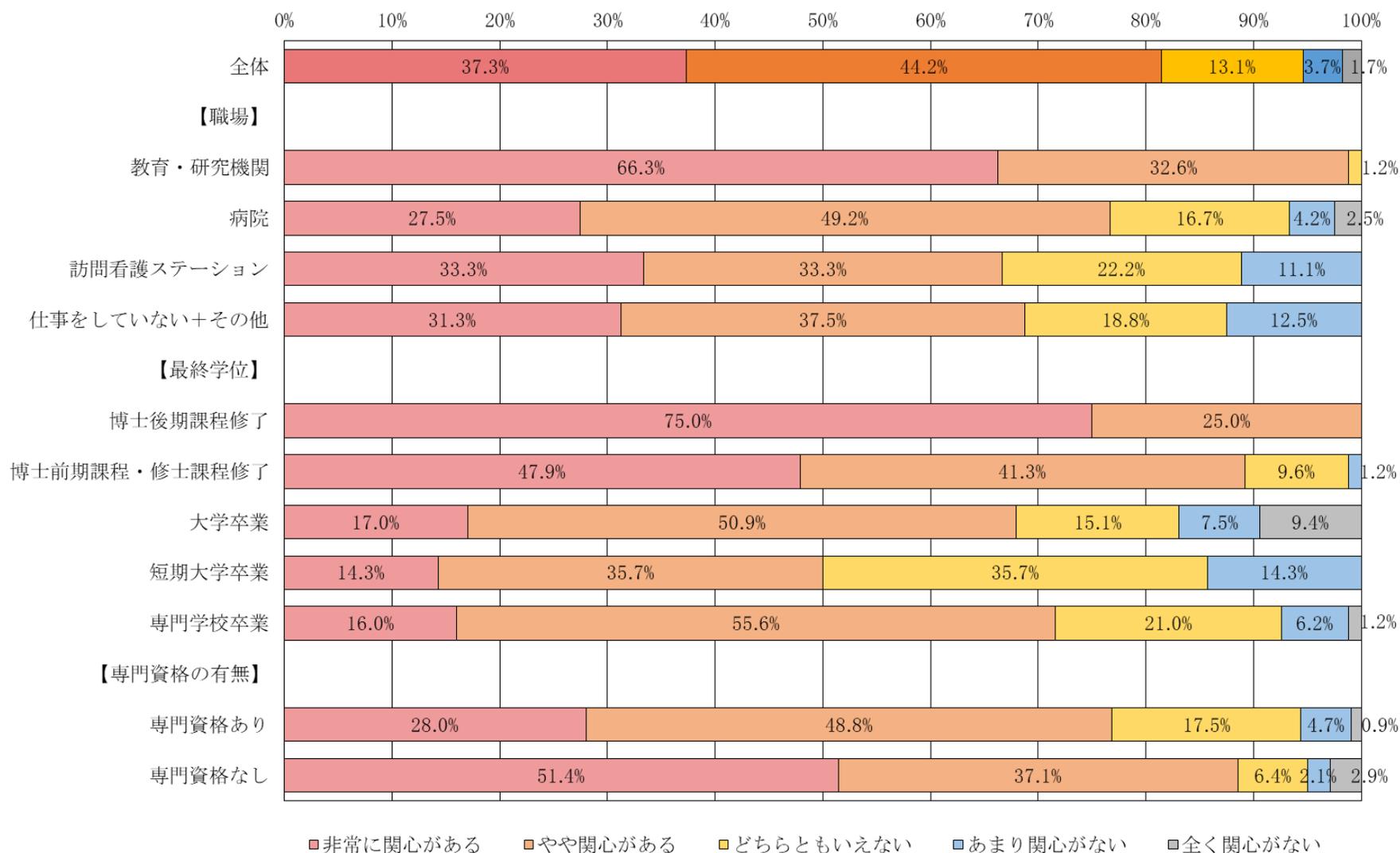


表 10 学会に求める研究活動支援（全体）

N=351

	非常に行ってほしい		行ってほしい		どちらかといえば行って欲しい		どちらともいえない		行う必要はない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
1. 研究に関する知識や技術の提供										
研究計画の相談や指導が受けられるシステムの構築	149	42.5	90	25.6	45	12.8	59	16.8	8	2.3
研究の方法論や分析方法に関するセミナーの開催	146	41.6	110	31.3	52	14.8	39	11.1	4	1.1
日本語論文の書き方についてのセミナーの開催	95	27.1	106	30.2	71	20.2	68	19.4	11	3.1
英語論文の書き方についてのセミナーの開催	44	12.5	59	16.8	82	23.4	128	36.5	38	10.8
最先端の研究に関するセミナーの開催	72	20.5	116	33.0	77	21.9	75	21.4	11	3.1
研究に関するセミナーをいつでも学会Webページで閲覧できるシステムの構築	156	44.4	139	39.6	38	10.8	16	4.6	2	0.6
2. 研究活動のためのネットワーク作り										
所属する地区で、がん看護の研究者と交流ができる場の構築（交流会の開催、メーリングリスト・SNSの活用など）	77	21.9	108	30.8	94	26.8	65	18.5	7	2.0
所属する地区で、がん看護の実践家と交流ができる場の構築（交流会の開催、メーリングリスト・SNSの活用など）	83	23.6	118	33.6	88	25.1	55	15.7	7	2.0
全国レベルで、がん看護の研究者と交流ができる場の構築（交流会の開催、メーリングリスト・SNSの活用など）	67	19.1	103	29.3	98	27.9	71	20.2	12	3.4
全国レベルで、がん看護の実践家と交流ができる場の構築（交流会の開催、メーリングリスト・SNSの活用など）	66	18.8	111	31.6	91	25.9	72	20.5	11	3.1
3. 学術活動・研究活動の促進										
若手の研究者や看護実践家が参加できる学会主導の研究プロジェクトの実施	86	24.5	115	32.8	84	23.9	57	16.2	9	2.6
若手の研究者や看護実践家への研究助成	113	32.2	103	29.3	80	22.8	50	14.2	5	1.4
若手の研究者や看護実践家を対象とした学会発表・投稿論文の表彰	81	23.1	92	26.2	74	21.1	87	24.8	17	4.8

図2 学会に求める研究活動支援（全体）

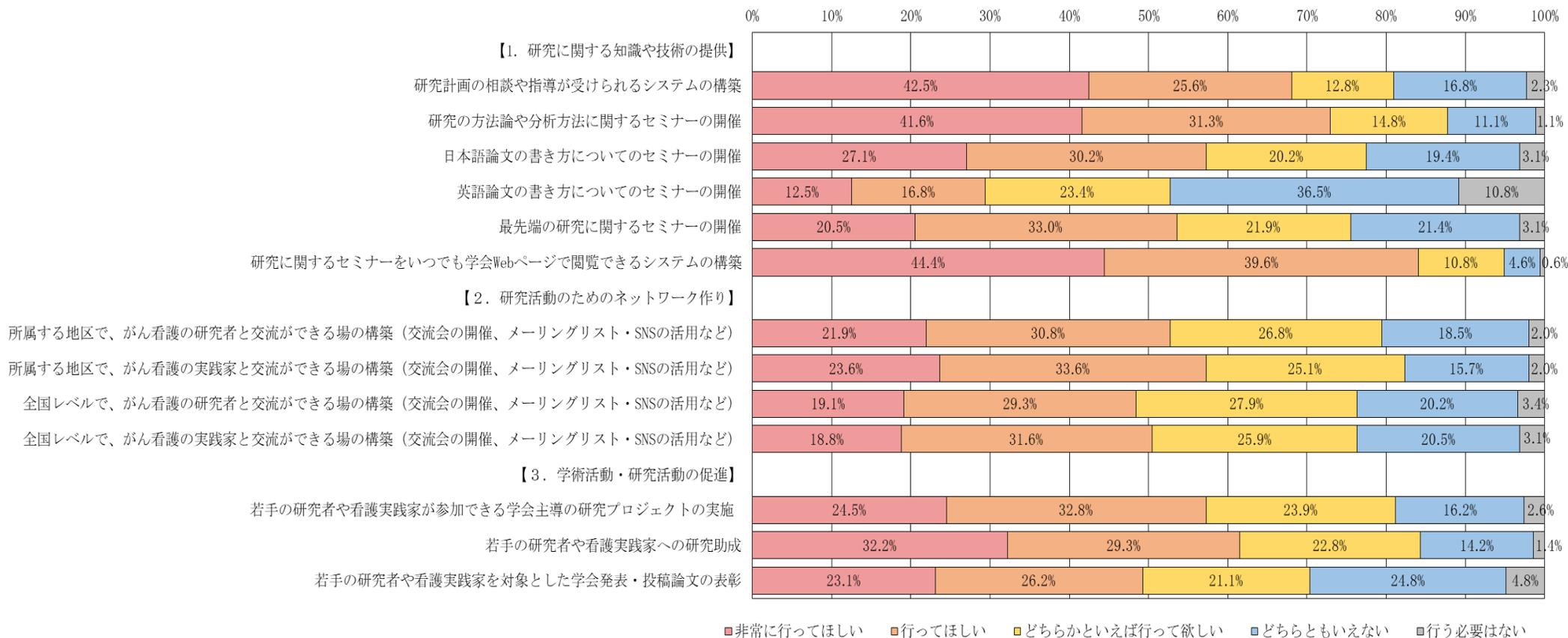


表 11 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：①研究計画の相談や指導が受けられるシステムの構築

	非常に行ってほしい		行ってほしい		どちらかといえば 行って欲しい		どちらともいえない		行う必要はない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
職場別										
教育・研究機関	32	37.2	21	24.4	8	9.3	21	24.4	4	4.7
病院	102	42.5	65	27.1	34	14.2	35	14.6	4	1.7
訪問看護ステーション	6	66.7	1	11.1	0	0.0	2	22.2	0	0.0
仕事をしていない+その他	9	56.3	3	18.8	3	18.8	1	6.3	0	0.0
最終学位別										
博士後期課程修了	12	33.3	4	11.1	5	13.9	13	36.1	2	5.6
博士前期課程・修士課程修了	87	52.1	34	20.4	17	10.2	25	15.0	4	2.4
大学卒業	21	39.6	14	26.4	11	20.8	6	11.3	1	1.9
短期大学卒業	8	57.1	4	28.6	0	0.0	2	14.3	0	0.0
専門学校卒業	21	25.9	34	42.0	12	14.8	13	16.0	1	1.2
専門資格の有無										
専門資格あり	89	42.2	62	29.4	24	11.4	33	15.6	3	1.4
専門資格なし	60	42.9	28	20.0	21	15.0	26	18.6	5	3.6

図3 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：①研究計画の相談や指導が受けられるシステムの構築

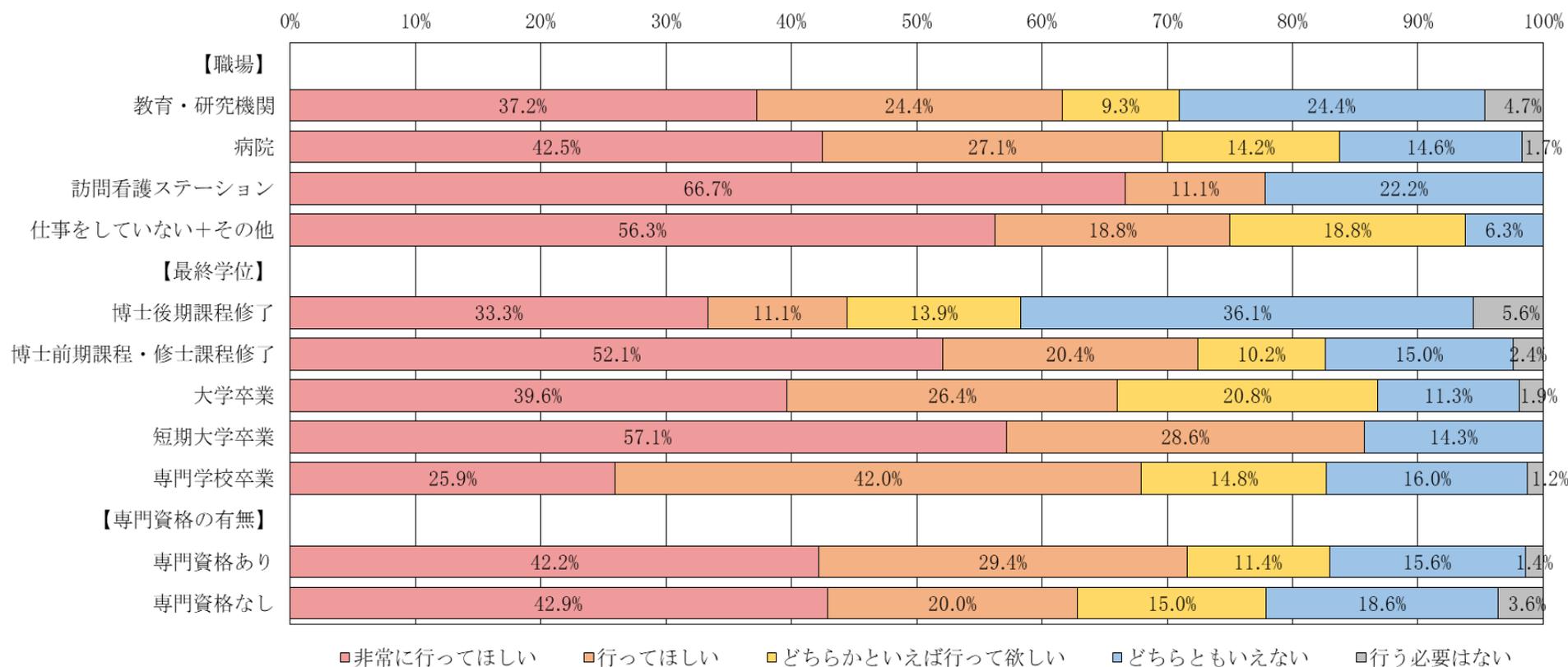


表 12 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：②研究の方法論や分析方法に関するセミナーの開催

	非常に行ってほしい		行ってほしい		どちらかといえば 行って欲しい		どちらともいえない		行う必要はない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
職場別										
教育・研究機関	41	47.7	24	27.9	12	14.0	7	8.1	2	2.3
病院	96	40.0	76	31.7	38	15.8	28	11.7	2	0.8
訪問看護ステーション	3	33.3	3	33.3	0	0.0	3	33.3	0	0.0
仕事をしていない+その他	6	37.5	7	43.8	2	12.5	1	6.3	0	0.0
最終学位別										
博士後期課程修了	13	36.1	9	25.0	5	13.9	8	22.2	1	2.8
博士前期課程・修士課程修了	82	49.1	48	28.7	23	13.8	12	7.2	2	1.2
大学卒業	22	41.5	14	26.4	11	20.8	6	11.3	0	0.0
短期大学卒業	5	35.7	7	50.0	2	14.3	0	0.0	0	0.0
専門学校卒業	24	29.6	32	39.5	11	13.6	13	16.0	1	1.2
専門資格の有無										
専門資格あり	87	41.2	69	32.7	29	13.7	24	11.4	2	0.9
専門資格なし	59	42.1	41	29.3	23	16.4	15	10.7	2	1.4

図4 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：②研究の方法論や分析方法に関するセミナーの開催

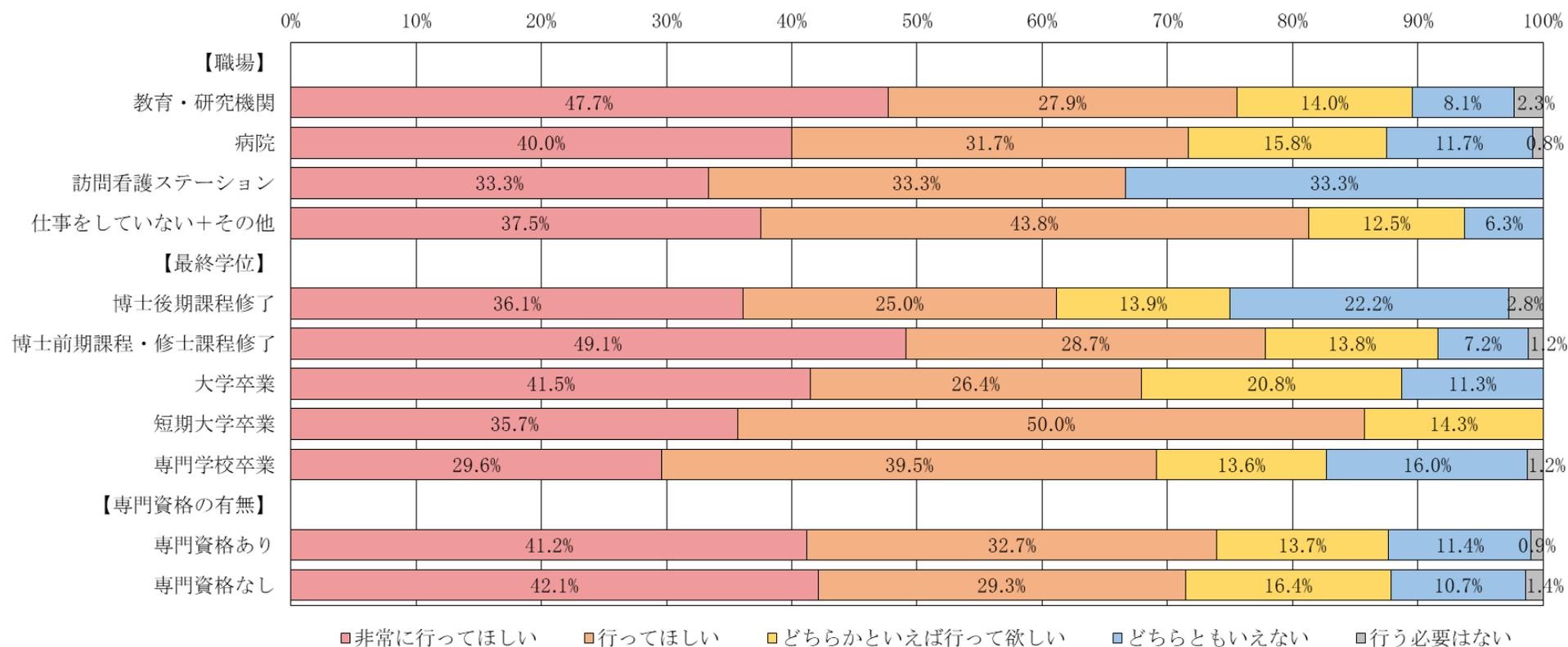


表 13 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：③日本語論文の書き方についてのセミナーの開催

	非常に行ってほしい		行ってほしい		どちらかといえば行って欲しい		どちらともいえない		行う必要はない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
職場別										
教育・研究機関	20	23.3	22	25.6	13	15.1	24	27.9	7	8.1
病院	70	29.2	78	32.5	50	20.8	39	16.3	3	1.3
訪問看護ステーション	2	22.2	2	22.2	1	11.1	4	44.4	0	0.0
仕事をしていない+その他	3	18.8	4	25.0	7	43.8	1	6.3	1	6.3
最終学位別										
博士後期課程修了	6	16.7	8	22.2	6	16.7	11	30.6	5	13.9
博士前期課程・修士課程修了	52	31.1	47	28.1	32	19.2	32	19.2	4	2.4
大学卒業	12	22.6	15	28.3	17	32.1	8	15.1	1	1.9
短期大学卒業	6	42.9	5	35.7	2	14.3	1	7.1	0	0.0
専門学校卒業	19	23.5	31	38.3	14	17.3	16	19.8	1	1.2
専門資格の有無										
専門資格あり	55	26.1	73	34.6	43	20.4	34	16.1	6	2.8
専門資格なし	40	28.6	33	23.6	28	20.0	34	24.3	5	3.6

図5 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：③日本語論文の書き方についてのセミナーの開催

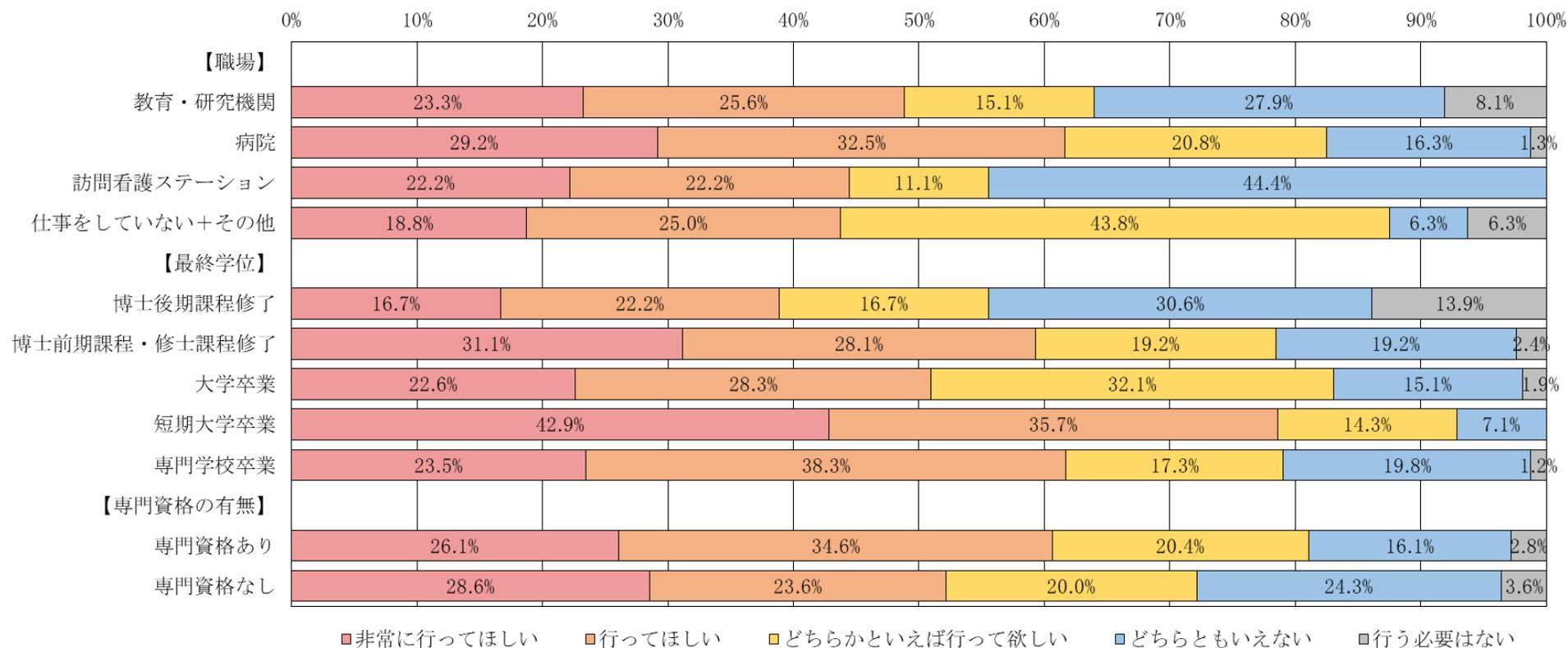


表 14 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：④英語論文の書き方についてのセミナーの開催

	非常に行ってほしい		行ってほしい		どちらかといえば行って欲しい		どちらともいえない		行う必要はない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
職場別										
教育・研究機関	23	26.7	30	34.9	14	16.3	15	17.4	4	4.7
病院	17	7.1	22	9.2	64	26.7	105	43.8	32	13.3
訪問看護ステーション	1	11.1	0	0.0	1	11.1	6	66.7	1	11.1
仕事をしていない+その他	3	18.8	7	43.8	3	18.8	2	12.5	1	6.3
最終学位別										
博士後期課程修了	9	25.0	9	25.0	10	27.8	5	13.9	3	8.3
博士前期課程・修士課程修了	29	17.4	39	23.4	42	25.1	47	28.1	10	6.0
大学卒業	4	7.5	4	7.5	9	17.0	27	50.9	9	17.0
短期大学卒業	0	0.0	3	21.4	4	28.6	6	42.9	1	7.1
専門学校卒業	2	2.5	4	4.9	17	21.0	43	53.1	15	18.5
専門資格の有無										
専門資格あり	14	6.6	23	10.9	57	27.0	89	42.2	28	13.3
専門資格なし	30	21.4	36	25.7	25	17.9	39	27.9	10	7.1

図6 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：④英語論文の書き方についてのセミナーの開催

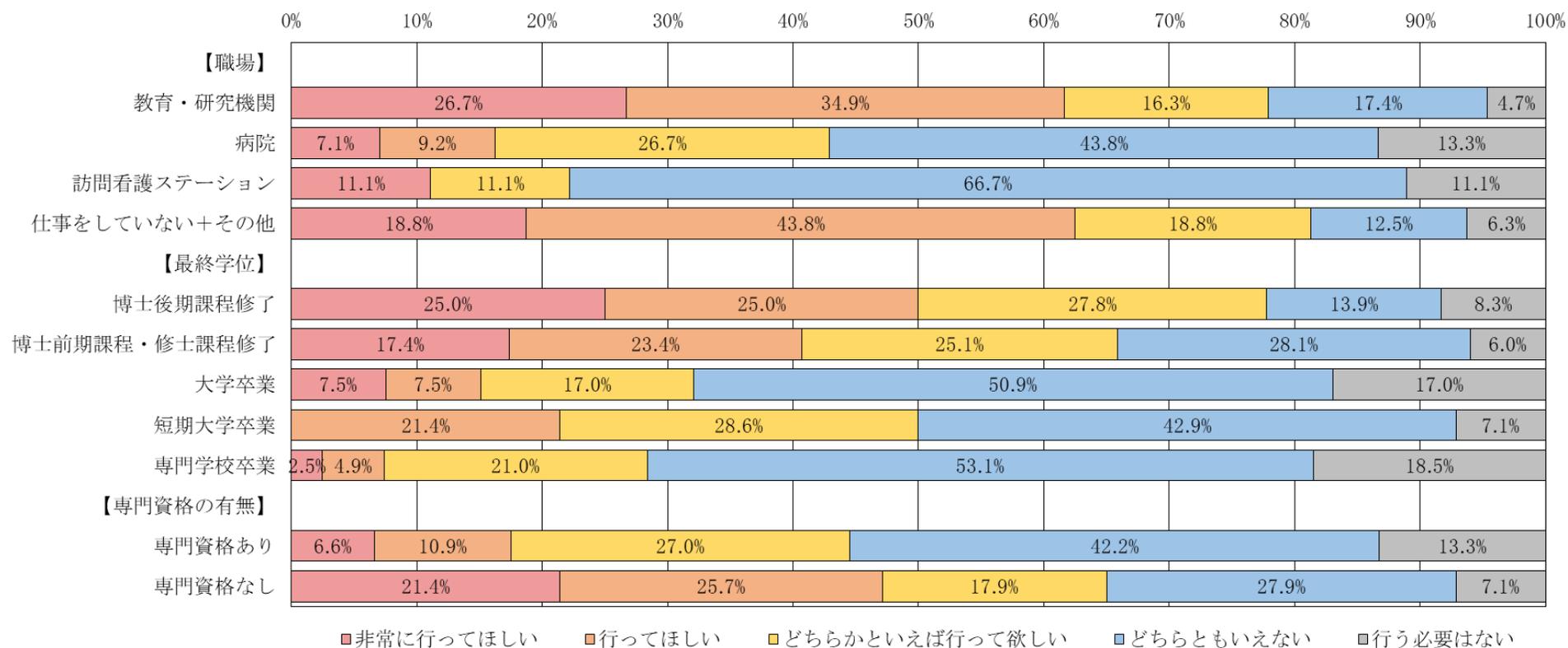


表 15 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：⑤最先端の研究に関するセミナーの開催

	非常に行ってほしい		行ってほしい		どちらかといえば 行って欲しい		どちらともいえない		行う必要はない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
職場別										
教育・研究機関	26	30.2	33	38.4	16	18.6	9	10.5	2	2.3
病院	38	15.8	77	32.1	55	22.9	61	25.4	9	3.8
訪問看護ステーション	2	22.2	3	33.3	1	11.1	3	33.3	0	0.0
仕事をしていない+その他	6	37.5	3	18.8	5	31.3	2	12.5	0	0.0
最終学位別										
博士後期課程修了	13	36.1	13	36.1	5	13.9	4	11.1	1	2.8
博士前期課程・修士課程修了	40	24.0	58	34.7	37	22.2	28	16.8	4	2.4
大学卒業	6	11.3	17	32.1	13	24.5	15	28.3	2	3.8
短期大学卒業	2	14.3	5	35.7	4	28.6	3	21.4	0	0.0
専門学校卒業	11	13.6	23	28.4	18	22.2	25	30.9	4	4.9
専門資格の有無										
専門資格あり	36	17.1	69	32.7	50	23.7	48	22.7	8	3.8
専門資格なし	36	25.7	47	33.6	27	19.3	27	19.3	3	2.1

図7 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：⑤最先端の研究に関するセミナーの開催

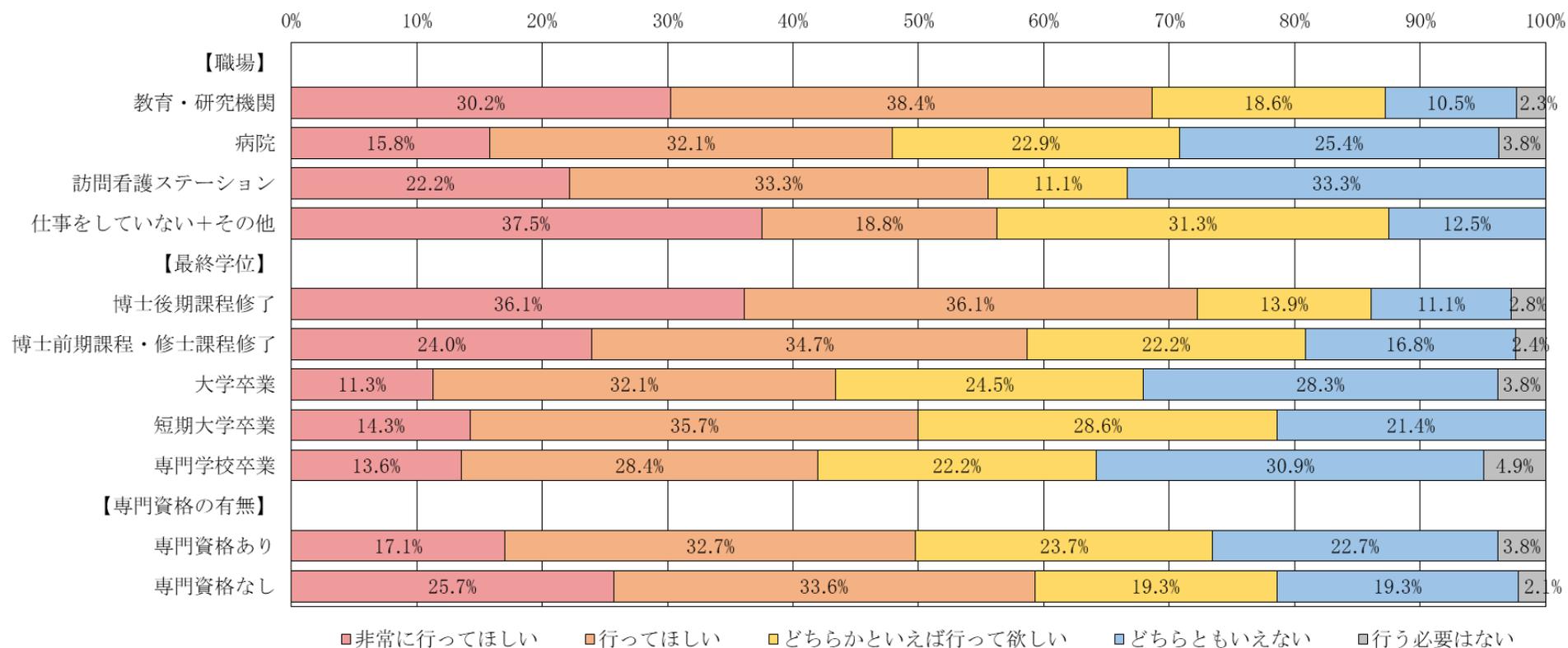


表 16 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：⑥研究に関するセミナーをいつでも学会 Web ページで閲覧できるシステムの構築

	非常に行ってほしい		行ってほしい		どちらかといえば行って欲しい		どちらともいえない		行う必要はない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
職場別										
教育・研究機関	46	53.5	26	30.2	10	11.6	3	3.5	1	1.2
病院	100	41.7	103	42.9	26	10.8	10	4.2	1	0.4
訪問看護ステーション	4	44.4	3	33.3	0	0.0	2	22.2	0	0.0
仕事をしていない+その他	6	37.5	7	43.8	2	12.5	1	6.3	0	0.0
最終学位別										
博士後期課程修了	16	44.4	12	33.3	5	13.9	3	8.3	0	0.0
博士前期課程・修士課程修了	89	53.3	59	35.3	15	9.0	3	1.8	1	0.6
大学卒業	17	32.1	27	50.9	7	13.2	1	1.9	1	1.9
短期大学卒業	4	28.6	7	50.0	2	14.3	1	7.1	0	0.0
専門学校卒業	30	37.0	34	42.0	9	11.1	8	9.9	0	0.0
専門資格の有無										
専門資格あり	87	41.2	92	43.6	19	9.0	13	6.2	0	0.0
専門資格なし	69	49.3	47	33.6	19	13.6	3	2.1	2	1.4

図8 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：⑥研究に関するセミナーをいつでも学会 Web ページで閲覧できるシステムの構築

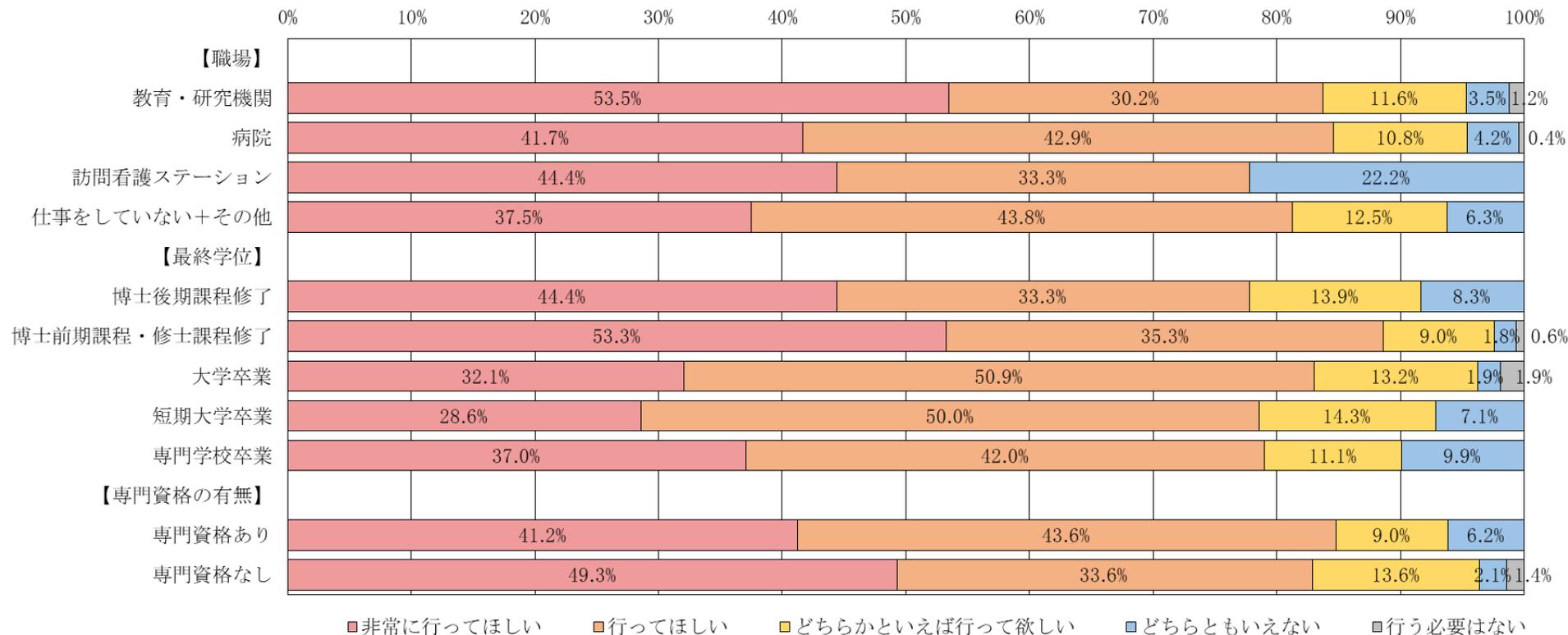


表 17 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：⑦所属する地区で，がん看護の研究者と交流ができる場の構築（交流会の開催，メーリングリスト・SNSの活用など）

	非常に行ってほしい		行ってほしい		どちらかといえば行って欲しい		どちらともいえない		行う必要はない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
職場別										
教育・研究機関	24	27.9	24	27.9	20	23.3	16	18.6	2	2.3
病院	52	21.7	77	32.1	63	26.3	43	17.9	5	2.1
訪問看護ステーション	1	11.1	4	44.4	1	11.1	3	33.3	0	0.0
仕事をしていない+その他	0	0.0	3	18.8	10	62.5	3	18.8	0	0.0
最終学位別										
博士後期課程修了	10	27.8	9	25.0	7	19.4	10	27.8	0	0.0
博士前期課程・修士課程修了	43	25.7	54	32.3	47	28.1	20	12.0	3	1.8
大学卒業	8	15.1	13	24.5	19	35.8	11	20.8	2	3.8
短期大学卒業	1	7.1	4	28.6	5	35.7	4	28.6	0	0.0
専門学校卒業	15	18.5	28	34.6	16	19.8	20	24.7	2	2.5
専門資格の有無										
専門資格あり	44	20.9	66	31.3	56	26.5	40	19.0	5	2.4
専門資格なし	33	23.6	42	30.0	38	27.1	25	17.9	2	1.4

表9 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：⑦所属する地区で，がん看護の研究者と交流ができる場の構築（交流会の開催，メーリングリスト・SNSの活用など）

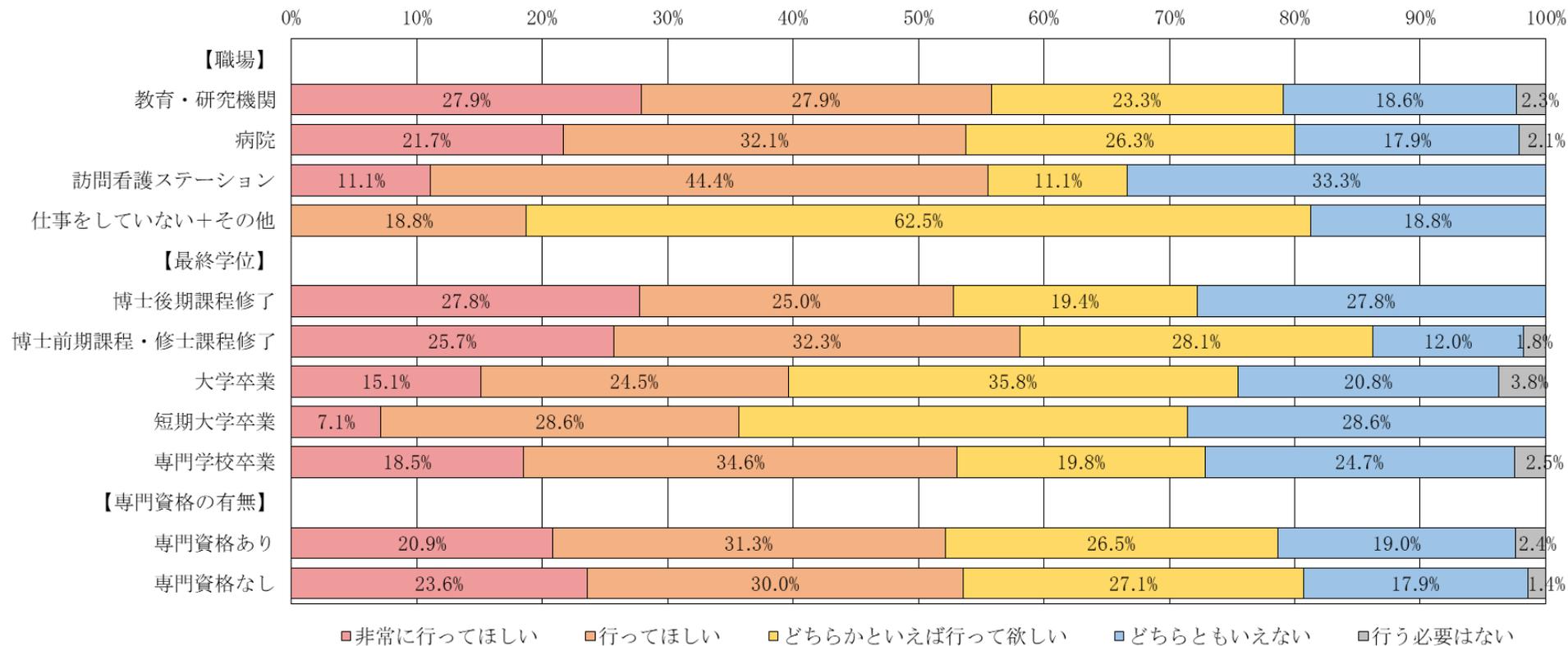


表 18 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：⑧所属する地区で，がん看護の実践家と交流ができる場の構築（交流会の開催，メーリングリスト・SNSの活用など）

	非常に行ってほしい		行ってほしい		どちらかといえば行って欲しい		どちらともいえない		行う必要はない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
職場別										
教育・研究機関	26	30.2	28	32.6	18	20.9	12	14.0	2	2.3
病院	56	23.3	80	33.3	60	25.0	39	16.3	5	2.1
訪問看護ステーション	0	0.0	5	55.6	2	22.2	2	22.2	0	0.0
仕事をしていない+その他	1	6.3	5	31.3	8	50.0	2	12.5	0	0.0
最終学位別										
博士後期課程修了	9	25.0	15	41.7	7	19.4	5	13.9	0	0.0
博士前期課程・修士課程修了	46	27.5	61	36.5	40	24.0	16	9.6	4	2.4
大学卒業	7	13.2	16	30.2	19	35.8	10	18.9	1	1.9
短期大学卒業	1	7.1	3	21.4	7	50.0	3	21.4	0	0.0
専門学校卒業	20	24.7	23	28.4	15	18.5	21	25.9	2	2.5
専門資格の有無										
専門資格あり	46	21.8	74	35.1	52	24.6	34	16.1	5	2.4
専門資格なし	37	26.4	44	31.4	36	25.7	21	15.0	2	1.4

表 10 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：⑧所属する地区で，がん看護の実践家と交流ができる場の構築（交流会の開催，メーリングリスト・SNSの活用など）

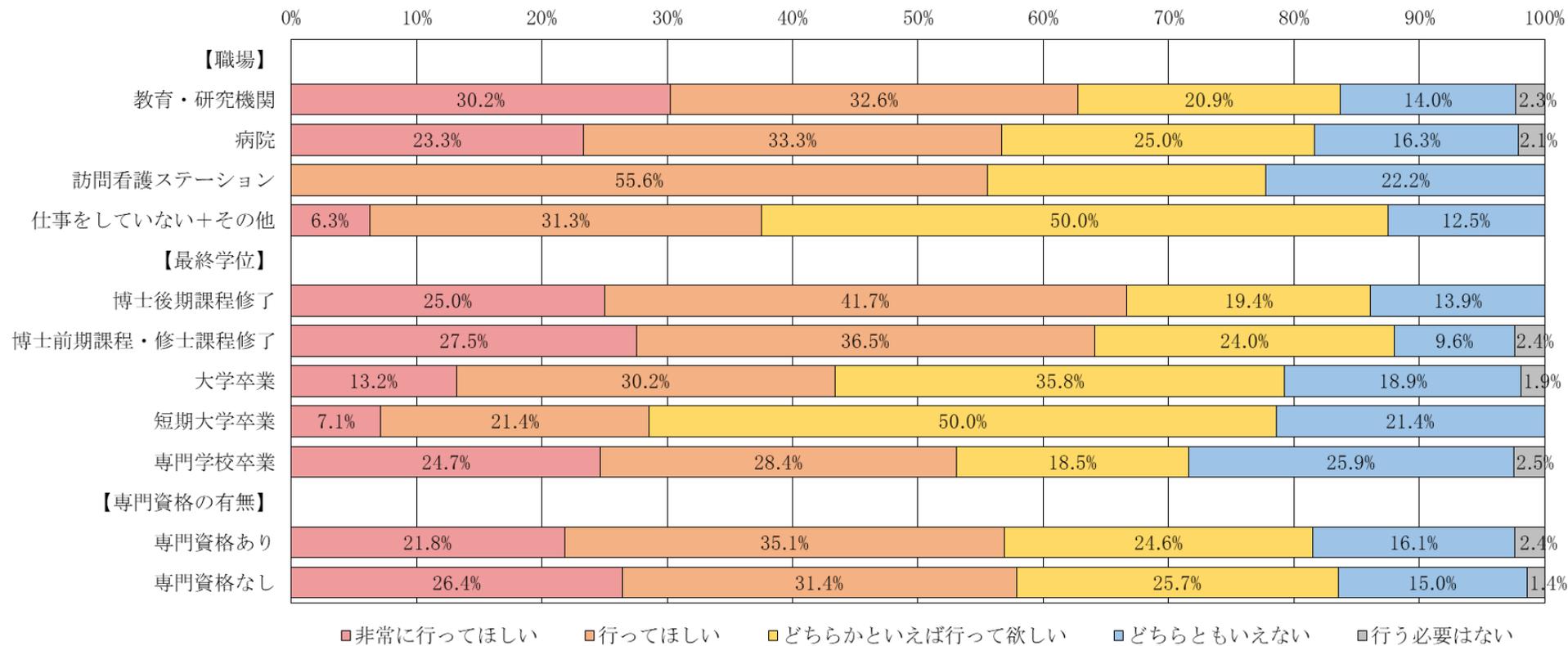


表 19 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：⑨全国レベルで，がん看護の研究者と交流ができる場の構築（交流会の開催，メーリングリスト・SNSの活用など）

	非常に行ってほしい		行ってほしい		どちらかといえば行って欲しい		どちらともいえない		行う必要はない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
職場別										
教育・研究機関	25	29.1	21	24.4	21	24.4	17	19.8	2	2.3
病院	41	17.1	77	32.1	65	27.1	48	20.0	9	3.8
訪問看護ステーション	0	0.0	2	22.2	3	33.3	3	33.3	1	11.1
仕事をしていない+その他	1	6.3	3	18.8	9	56.3	3	18.8	0	0.0
最終学位別										
博士後期課程修了	10	27.8	9	25.0	8	22.2	9	25.0	0	0.0
博士前期課程・修士課程修了	40	24.0	52	31.1	41	24.6	28	16.8	6	3.6
大学卒業	5	9.4	12	22.6	27	50.9	6	11.3	3	5.7
短期大学卒業	1	7.1	3	21.4	5	35.7	5	35.7	0	0.0
専門学校卒業	11	13.6	27	33.3	17	21.0	23	28.4	3	3.7
専門資格の有無										
専門資格あり	34	16.1	68	32.2	54	25.6	45	21.3	10	4.7
専門資格なし	33	23.6	35	25.0	44	31.4	26	18.6	2	1.4

図 11 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：⑨全国レベルで，がん看護の研究者と交流ができる場の構築（交流会の開催，メーリングリスト・SNS の活用など）

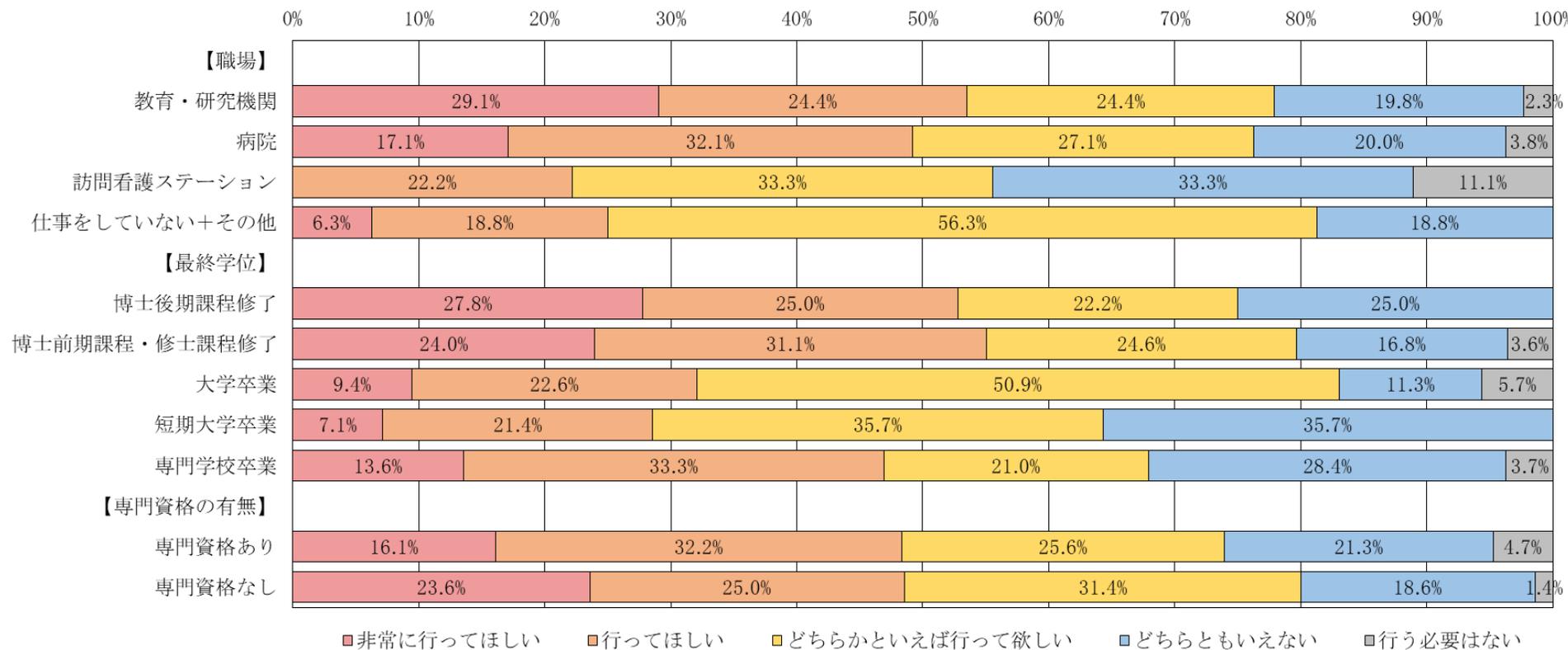


表 20 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：⑩全国レベルで，がん看護の実践家と交流ができる場の構築（交流会の開催，メーリングリスト・SNSの活用など）

	非常に行ってほしい		行ってほしい		どちらかといえば行って欲しい		どちらともいえない		行う必要はない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
職場別										
教育・研究機関	21	24.4	28	32.6	20	23.3	15	17.4	2	2.3
病院	43	17.9	79	32.9	60	25.0	50	20.8	8	3.3
訪問看護ステーション	0	0.0	2	22.2	3	33.3	3	33.3	1	11.1
仕事をしていない+その他	2	12.5	2	12.5	8	50.0	4	25.0	0	0.0
最終学位別										
博士後期課程修了	9	25.0	13	36.1	7	19.4	7	19.4	0	0.0
博士前期課程・修士課程修了	37	22.2	55	32.9	41	24.6	28	16.8	6	3.6
大学卒業	6	11.3	14	26.4	21	39.6	10	18.9	2	3.8
短期大学卒業	1	7.1	3	21.4	5	35.7	5	35.7	0	0.0
専門学校卒業	13	16.0	26	32.1	17	21.0	22	27.2	3	3.7
専門資格の有無										
専門資格あり	36	17.1	71	33.6	51	24.2	44	20.9	9	4.3
専門資格なし	30	21.4	40	28.6	40	28.6	28	20.0	2	1.4

図 12 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：⑩全国レベルで，がん看護の実践家と交流ができる場の構築（交流会の開催，メーリングリスト・SNS の活用など）

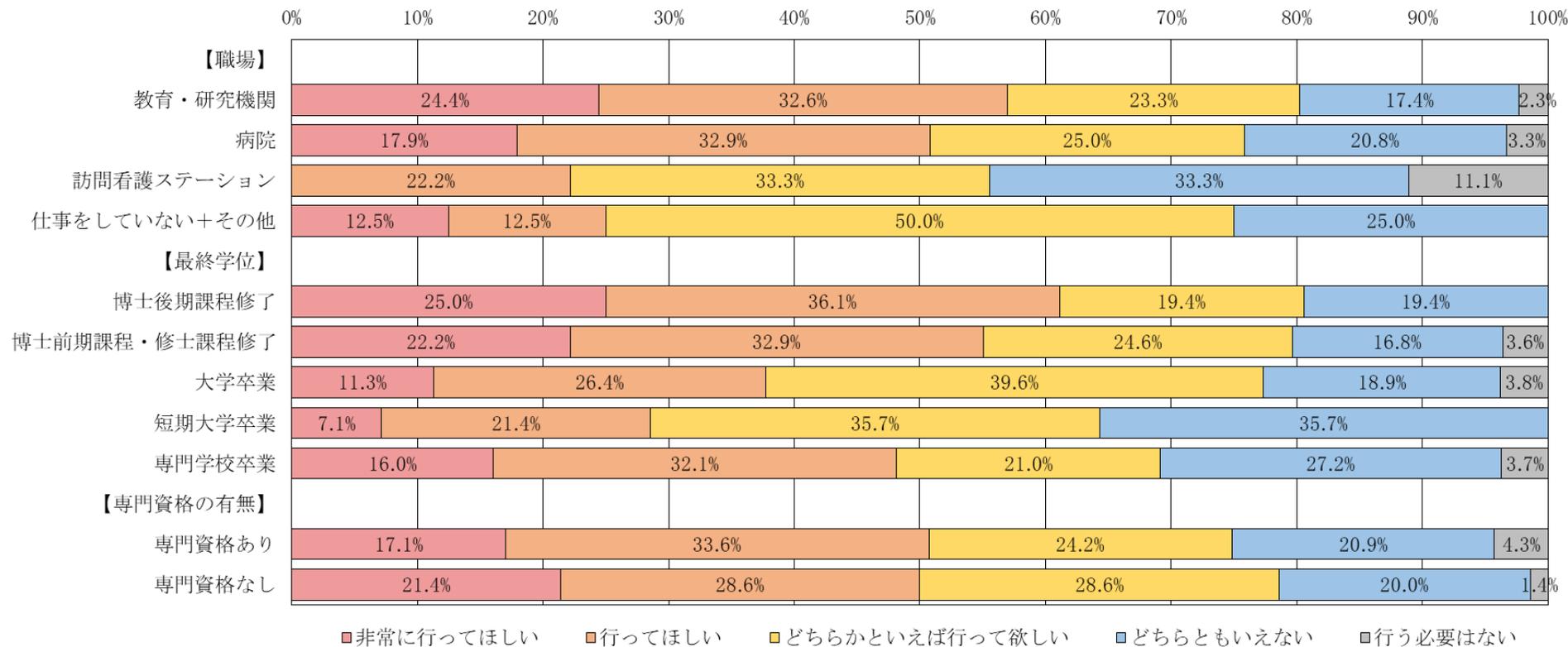


表 21 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：⑩若手の研究者や看護実践家が参加できる学会主導の研究プロジェクトの実施

	非常に行ってほしい		行ってほしい		どちらかといえば行って欲しい		どちらともいえない		行う必要はない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
職場別										
教育・研究機関	29	33.7	25	29.1	15	17.4	13	15.1	4	4.7
病院	57	23.8	79	32.9	63	26.3	36	15.0	5	2.1
訪問看護ステーション	0	0.0	3	33.3	2	22.2	4	44.4	0	0.0
仕事をしていない+その他	0	0.0	8	50.0	4	25.0	4	25.0	0	0.0
最終学位別										
博士後期課程修了	9	25.0	13	36.1	7	19.4	7	19.4	0	0.0
博士前期課程・修士課程修了	52	31.1	59	35.3	31	18.6	20	12.0	5	3.0
大学卒業	6	11.3	14	26.4	20	37.7	10	18.9	3	5.7
短期大学卒業	2	14.3	2	14.3	7	50.0	3	21.4	0	0.0
専門学校卒業	17	21.0	27	33.3	19	23.5	17	21.0	1	1.2
専門資格の有無										
専門資格あり	45	21.3	77	36.5	54	25.6	29	13.7	6	2.8
専門資格なし	41	29.3	38	27.1	30	21.4	28	20.0	3	2.1

図 13 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：⑩若手の研究者や看護実践家が参加できる学会主導の研究プロジェクトの実施

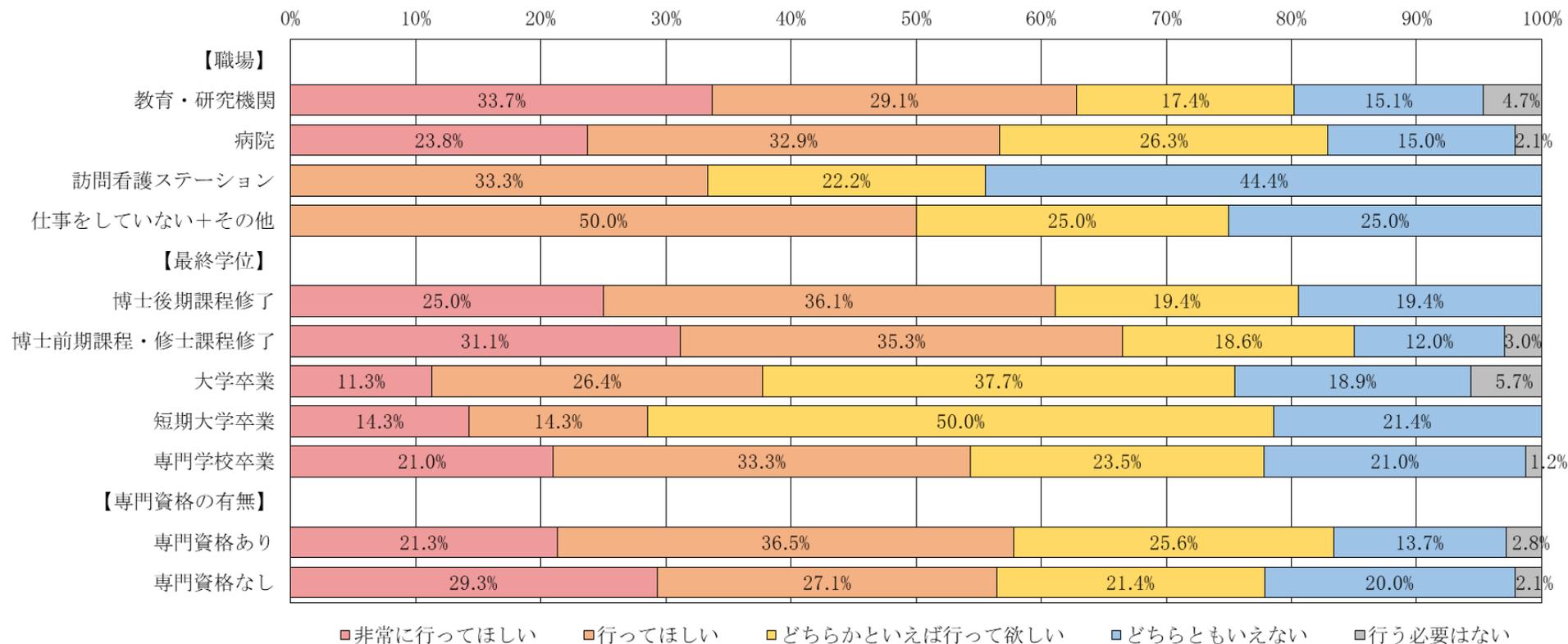


表 22 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：⑫若手の研究者や看護実践家への研究助成

	非常に行ってほしい		行ってほしい		どちらかといえば行って欲しい		どちらともいえない		行う必要はない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
職場別										
教育・研究機関	37	43.0	22	25.6	17	19.8	8	9.3	2	2.3
病院	68	28.3	74	30.8	58	24.2	37	15.4	3	1.3
訪問看護ステーション	2	22.2	1	11.1	2	22.2	4	44.4	0	0.0
仕事をしていない+その他	6	37.5	6	37.5	3	18.8	1	6.3	0	0.0
最終学位別										
博士後期課程修了	16	44.4	9	25.0	6	16.7	4	11.1	1	2.8
博士前期課程・修士課程修了	70	41.9	53	31.7	24	14.4	17	10.2	3	1.8
大学卒業	8	15.1	10	18.9	23	43.4	12	22.6	0	0.0
短期大学卒業	4	28.6	3	21.4	4	28.6	3	21.4	0	0.0
専門学校卒業	15	18.5	28	34.6	23	28.4	14	17.3	1	1.2
専門資格の有無										
専門資格あり	56	26.5	68	32.2	53	25.1	31	14.7	3	1.4
専門資格なし	57	40.7	35	25.0	27	19.3	19	13.6	2	1.4

図 14 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：⑫若手の研究者や看護実践家への研究助成

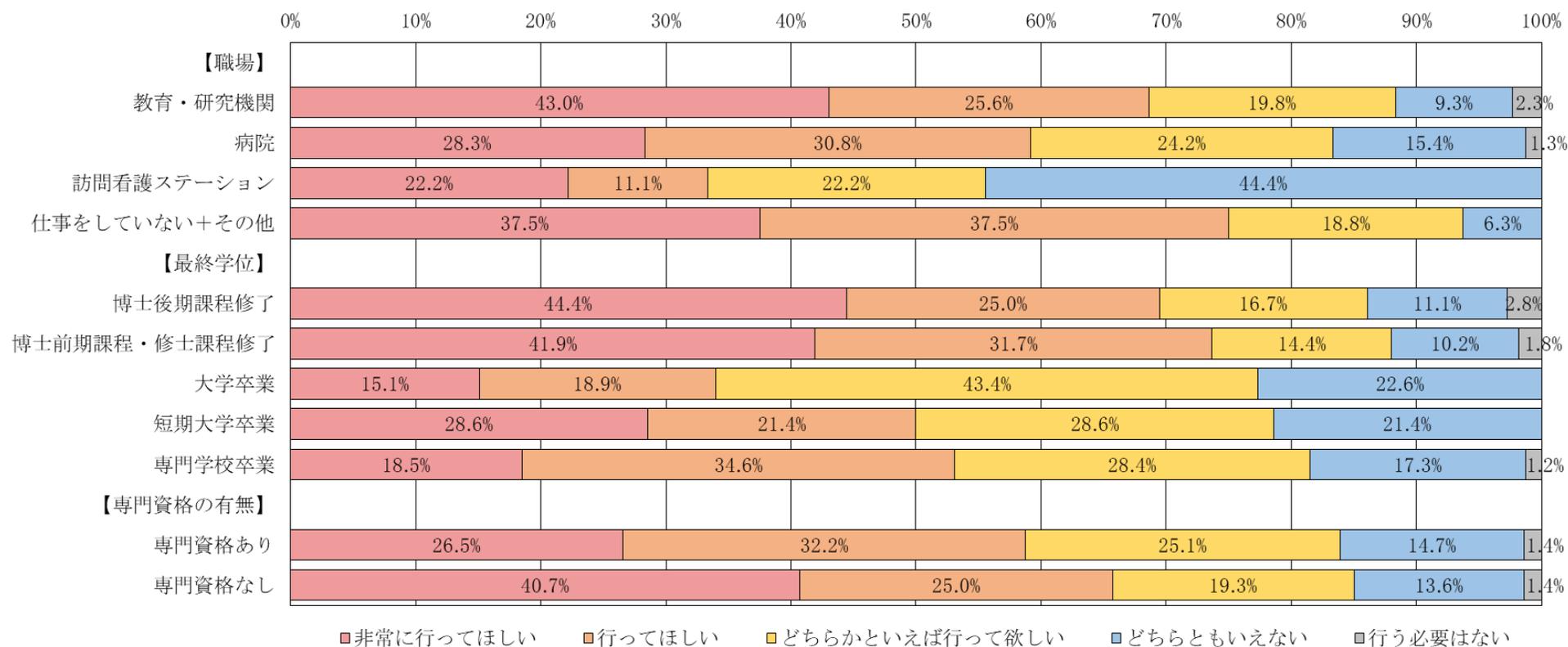


表 23 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：⑬若手の研究者や看護実践家を対象とした学会発表・投稿論文の表彰

	非常に行ってほしい		行ってほしい		どちらかといえば行って欲しい		どちらともいえない		行う必要はない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
職場別										
教育・研究機関	27	31.4	24	27.9	18	20.9	13	15.1	4	4.7
病院	52	21.7	63	26.3	52	21.7	65	27.1	11	4.6
訪問看護ステーション	0	0.0	1	11.1	1	11.1	6	66.7	1	11.1
仕事をしていない+その他	2	12.5	4	25.0	3	18.8	6	37.5	1	6.3
最終学位別										
博士後期課程修了	12	33.3	11	30.6	7	19.4	5	13.9	1	2.8
博士前期課程・修士課程修了	49	29.3	45	26.9	32	19.2	29	17.4	12	7.2
大学卒業	4	7.5	12	22.6	14	26.4	21	39.6	2	3.8
短期大学卒業	3	21.4	4	28.6	2	14.3	5	35.7	0	0.0
専門学校卒業	13	16.0	20	24.7	19	23.5	27	33.3	2	2.5
専門資格の有無										
専門資格あり	40	19.0	56	26.5	52	24.6	54	25.6	9	4.3
専門資格なし	41	29.3	36	25.7	22	15.7	33	23.6	8	5.7

図 15 学会に求める研究活動支援（対象者の背景別）：⑬若手の研究者や看護実践家を対象とした学会発表・投稿論文の表彰

